

シーザーの妻
「三幕・喜劇」

サマセット・モーム 作

(田原 創 訳)

登場人物

アーサー・リトル卿（ナイトの爵位を二つ持つ四十五歳の経験豊かな外交官）

ロナルド・パリー（ロニー、アーサー・リトル卿の秘書、エサリッジ夫人の弟）

ヘンリー・プリチャード（アーサー・リトル卿の甥、プリチャード夫人の息子）

リチャード・アップルビー下院議員（ジョージ、六十歳位、叩き上げの好人物）

オスマン・パシャ（かなり年配のエジプト副王）

ヴァイオレット・リトル（アーサー・リトル卿の妻、とてもかわいい二十歳の女）

エサリッジ夫人（アン、ロナルド・パリーの姉、魅力的な四十女）

プリチャード夫人（クリステイナ、アーサー・リトル卿の妹）

アップルビー夫人（ファニー、アップルビー下院議員の妻、年配の気取らない女）

イギリス人の執事、原住民の召使たち、アラブ人の庭師

舞台はカイロにあるイギリス領事代理の家と庭である。

第一幕

カイロにある領事代理公邸の居間。窓はアラビア風で、ドアの縁も同じだが、そのほかはイギリス風の部屋で、風通しがよく広々としている。家具はラッカー塗装のチップエンドル風（曲線が多くて装飾的な意匠）で、椅子とソファーには涼しそうなチンツ（光沢をつけた派手な模様の木綿）が掛けてあり、ガラスの花瓶にはバラの切り花が入っていて、植木鉢にはツツジが生えている。しかし、あちこちに東洋の古代の遺物、兜と甲冑、木工品があつて、イスラム教徒のエジプト征服を思い起こさせる。一方、斑岩（古代エジプトで産出した赤地に長石結晶を含んだ硬い岩石）の古代の神、青い陶器に彫られた偶像、青いお椀が古代文明を思い出させる。

幕が上がると、部屋には誰もおらず、暑さをしのぐためにブラインドが下ろしてあり、薄暗くて謎めいている。領事代理の使用人である赤と金の派手な制服を着た黒い肌の原住民の召使が入って来てブラインドを上げる。窓越しにヤシ、オレンジにレモンなど巨大な葉の生えた熱帯植物のある庭が、さらに、その向こうには輝くばかりの青い空が見える。遠くで喉の奥から声を出す物悲しいアラビアの歌が聞こえる。薄青のギャバジン（ゆるやかな長い上着）を着た庭師が腕に籠を載せて通る。

召使 庭師

Es-salâm 'alêkum. (あなた様が^レ無事でありますように。)

U'alêkum es-Salâm waramet Allâh wa barakâta. (あんたも無事で神のお慈悲とお恵みがありますように。)

召使は出て行く。庭師はちょっと立ち止まってあちこちに伸びたつる草をそれ以上広げられないようにしてから去って行く。ドアが開く。アップルビー夫人がアン・エサリツジと一緒に入って来て、すぐ後にヴァイオレットが続く。アンは四十女だが、まだ魅力的でとても感じがよく思いやりがある。世慣れた女で如才なく自制心がある。明るい夏らしい服を着ている。アップルビー夫人は年配の気取らない女で、地味だが安物ではない服を着ている。北イングランドの製造業者の妻で、かなりやぼったい服に大金を使っている。ヴァイオレットはともかわい二十歳の若い女である。モスリンのワンピースを着てとてもはつらつとしており、イギリス風に見える。外見には何か春を思わせる純な感じがあり、服装は流行を追うというよりもむしろロマンティックなものである。パリのファッション紙の絵というよりもむしろゲーンズボロが描く肖像画の貴婦人を思わせ

る。昼食が終わったばかりで、彼女たちが入って来ても、後から来る男たちのためにドアは開けたままである。

アップルビー夫人　ここは何て涼しいんでしょう！　昼食の前にわたしたちがいたのはこの部屋じゃなかったわよね？

アン　違いますわ。ここは午前中ずっと窓を閉めてブラインドを下ろしてあったから、入って来た時にとっても涼しいんです。

アップルビー夫人　二、三日ここにいたら、あまり暑さを感じなくなるでしょうね。

アン　あら、でも、上エジプト（エジプトの二つの主要行政区分の一つでカイロ以南のスーダン国境に至る地域）に比べたらこの暑さは何でもありませんわ。

ヴァイオレット　「入って来ながら」アップルビー夫人が暑いっておっしゃってるの？　わたしは暑いのが好き。

アン　ねえヴァイオレット、五月が過ぎて六月になるまでお待ちなさいな。暑さがどれだけこたえるか、あなたは知らないのよ。

ヴァイオレット　わたしは暑いのを楽しみにしているの。前世のどこかでトカゲだったに違いないわ。

アップルビー夫人　多分、最初の年はあなたも暑さを感じないでしょうね。わたしにはカナダに定住している兄がいるけど、イギリスから出て来た人たちは後々感じるような寒さを最初の年は全然感じないって言ってるわ。

アン　わたしはここで何度も冬を過ごしてきたけど、いつだって三月の十五日までには出て行くことにしています。

アップルビー夫人　まあ、そんなに遅くまでいるの？

アン　あら、とんでもない。そんなことしたら、リトル夫人が断然沈んだ気持ちになりますわ。

ヴァイオレット　バカなこと言わないで、アン、わたしたちはあなたにできるだけ長くいてほしいのよ。

アン　以前、わたしはカイロにマンションを持っていましたが、今は手放してしまったので、万事解決するまで公邸に来て泊まるようにと、リトル夫人に言われたんです。

アップルビー夫人　まあ、それなら、あなたは結婚される前のアーサー卿をご存じなのね？

アン　ええ、そうです、あの方はわたしの最も古くからのお友達のお一人ですわ。

リトル夫人はわたしのことを我慢してくださるようなとても優しい性格をお持ちなんだと思わざるを得ませんわ。

ヴァイオレット　それとも、あなたが申し分のなくらい驚異的に如才ない人に違くないということよ、ねえ。

アップルビー夫人　わたしが信じる場所では、どちらも少しずつね。

アン　去年の七月のある日、アーサーがわたしに会いに来て、世界で一番素敵な娘と結婚するつもりだとおっしゃったので、もちろん、お別れすることを考

えました。男性は独身時代の友情は続けられると考えるけど、絶対にそうはなりませんもの。

アップルビー夫人 妻はそこに気をつけるのが普通だわ。

ヴァイオレット でも、そんなのバカバカしいと思うわ。特に、アーサーのようにとても長いこと独身でいて、わたしが入り込むまで交際範囲を広げるのが当然だった人についてはね。それに、わたしはアンが大好きですもの。

アン そう言ってくださって嬉しいわ。

ヴァイオレット わたしは誰の知り合いもなくここに来ました。だって、それほど年じゃなかったでしょ？

アップルビー夫人 十九だったの？

ヴァイオレット いえ、違います、それよりは上でしたわ。もうすぐ二十歳になるところでした。

アップルビー夫人 「ほほえみながら」あらまあ！

ヴァイオレット 気がついたら突然アーサーのような地位にある人の奥さんになっていたっていうのはかなりの驚きでした。わたしはひどく人の目が気になりました。みんなの目がわたしに注がれていると感じました。半分東洋で半分ヨーロッパの国でヘマなことをするのがどんなに簡単か、ご存じないでしょ。

アン 半ダースもの列強のひどく敏感な代理人たちを全部扱わなければいけないのは言うまでもないわね。

ヴァイオレット それに、いいこと、ここではどんなにささいな失敗でもアーサーと彼の仕事に最大級の害を及ぼすかもしれないっていう感じがあったわ。わたしは学校の教室を出たばかりなのに、政治家みたいだった。もしアンがいなかったら、わたしはメチャメチャな状況を作ってしまったでしょうね。

アン あら、そうは思わないわ。あなたにはいいところが二つあって、それでした。あなたの経験不足が許されたのよ。気品と美しさね。

ヴァイオレット とても素敵なことを言ってくださるわね、アン。

アップルビー夫人 あなたたちの結婚がとてもロマンチックだったから、どうしたらあなたに対して優しい気持ちにならないでいられたか分からないくらいよ。

ヴァイオレット 列強の代理人の妻が晩餐会で分相応な席を与えられていないと思っている時に、心の中にロマンスが入る余地はあまりないわ。

アップルビー夫人 結婚からたらされる興奮にあなたが少なからず酔っているんじゃないかって、あの頃思ったのを覚えているわ。

ヴァイオレット わたしも興奮してたのよ。

アップルビー夫人 アーサー卿は絶対に結婚しない方だって、みんながずっと思ってた。あの方は仕事しか眼中にないって思ってたのよね。素晴らしい経歴をお持ちだったでしょ？

ヴァイオレット 今までに会った中で一番有能な人間だって、首相がおっしゃってたわ。

アン どの政府にとっても慰めになる方だって、わたしはずっと思っていましたわ。誰かがめちやめちやな状況を作ってしまった時は、いつだってあの方がちやんとするために送られてきたんですもの。

ヴァイオレット ええ、いつもそうだったわ。

アップルビー夫人 主人が今朝言っていたばかりよ。あの方だけは、慌てて結婚しちゃうもない人だったって。

ヴァイオレット あの人がゆっくり後悔しないように祈りましょう。

アン 「ほほえみながら」アップルビー夫人はすべてを知りたくてうずうずしてるのよ、ヴァイオレット。

アップルビー夫人 わたしはオバサンですからね、リトル夫人。

ヴァイオレット 「明るく」ええ、アーサーとは週末のパーティーで会ったの。あの人は休暇で帰郷していて、あらゆる種類の重要人物たちが招待されてた。わたしはびっくりして肝をつぶしたわ。公爵夫人たちは身分を示すイチゴの葉飾りをいたるところにぶら下げてわたしを見下すの。そして、大臣の奥さんたちは齒を突き出してわたしを鼻であしらったわ。

アン 何てバカなことを言うの、ヴァイオレット！

ヴァイオレット わたしはアーサーが怖い人なんじゃないかと思ってた。だって、あの人が偉大な人だって知ってたから。でもね、ちっとも怖くなかった。最初はむしろ父親みたいところがあって、それでわたしはあの人に生意気な口を利いたの。

アン あの方の驚きが想像できるわ。二十年間、そんなことをした人はいなかったもの。

ヴァイオレット ちよっとでもアーサーのことを知れば、あの人が何かを望んだ時、躊躇しないで求めるってことが分かるわ。晚餐の時、わたしが隣に座ってほしいって、パーティーの女主人に言ったんですもの。そんなの女主人は全然気に入らなかつたけど、ダメとは言いたくなかつたのね。どういう訳かアーサーには誰も反対しないの。大臣の奥さんたちは前にも増してラクダみたいに見えたし、日曜の日が暮れる頃には公爵夫人たちのイチゴの葉飾りは丸まってひび割れ始めたわ。

アン 女主人が気の毒ね、同情するわ。パーティーのために正に名士を捕まえたのに、偶数にするためだけに呼んだ小娘以外とは誰とも話す気になれないなんて言われたんじゃ！

アップルビー夫人 あの方は一目見ただけであなたと恋に落ちたの？

ヴァイオレット 今はそう言ってるわ。

アップルビー夫人 あなたは知ってたの？

ヴァイオレット 正にそんな風だとは思ったのよね、ありそうもないことだけど。その後、知り合ったばかりの女性から次の週末の招待状が来て、アーサーも来るって言うの。その時、わたしの胸は本当にドキドキし始めたわ。わたしはその手紙を姉の部屋に持って行ってベッドに座り、二人で話し合ったの。「あの方はわたしにプロポーズするつもりかしら？」って、わたしは

言った。「それとも、しないつもりかしら？」ってね。姉は言ったわ。「彼があなたの中に何を見出したのか、想像もつかないわ。プロポーズされたら承諾するつもりなの？」って訊くの。「いえ、そんな」ってわたしは言った。「だって、あの人はわたしより二十も年上なのよ！」ってね。でも、もちろん、わたしは最初から承諾するつもりだった。あの人がたとえ百歳でも、わたしは気にしなかったでしょうね。わたしがそれまでに知り合った中で、あの人は一番素晴らしい人だったんですもの。

アップルビー夫人 それで、それまでに実際一度しか会ったことがないのに、あの方はその週末にプロポーズしたっていうの？

ヴァイオレット わたしがその日の午後下に降りて行ったら、あの人はもうそこにしたのよ。わたしがお茶を一杯飲み終わつたとたん、あの人が言ったの。「散歩に出掛けよう」って。で、わたしは二杯目を飲みたかつたけど、そんなこと言いたくなかつたから、出掛けたわ。でも、半時間後にはコテージで二杯目を一緒に飲んで、その時にわたしたちは婚約したのよ。

アップルビーがオスマン・パシヤと一緒に入って来る。アップルビー氏は下院議員になったばかりの叩き上げの人物である。六十歳位で、白髪の混じりの顎鬚を生やしてかなりずんぐりしており、話すと多少なまりがあつて、如才なくて気取りのない好人物である。青いサージのスーツを着ている。オスマン・パシヤは浅黒い顎鬚を生やした肥満体の東洋人で、かなりの年配だが威厳がある。エジプト副王庁の公式のフロックコートを着てトルコ帽を被っている。

アップルビー もうすぐアーサー卿が見えるぞ。今、秘書の一人と話している。

ヴァイオレット 本当に、あの人たちたらひど過ぎるわ。主人が食べ物を口一杯に頬張って食べている時だつてほつておいてくれないんですもの。

オスマン・パシヤ Vous permettez que j'apporte ma cigarette, chère Madame.

ヴァイオレット もちろんですわ。こちらにいらしてお座りになつて、閣下。

アップルビー カイロにテクニカルカレッジ(義務教育終了後二年間工業技術・芸術・農業などを教える)を設立しようという閣下の提案にわしがどんなに興味を持つたかを閣下に話したいのだが、わしはフランス語が話せなくてな。ヴァイオレット まあ、でも、閣下は英語を完璧に理解されるし、本当はわたしと同じくらい話せると思いますけど、そうしようとしませんわ。

オスマン・パシヤ Madame, je ne comprends l'anglais que quand vous le parlez, et tout galant homme sait ce que dit une jolie femme.

アン 「アップルビー夫妻のために通訳して」閣下がおっしゃるには、リトル夫人が英語を話す時だけ英語が分かるけど、ちゃんとした男なら誰だつてかわいいた言ふことは分かるんですって。

ヴァイオレット 閣下みたいに素敵な褒め言葉をわたしに言つてくださる方はいませんわ。わたしはアラビア語を習っていますのよ。

オスマン・パンヤ *C'est une bien belle langue, et vous, Madame vous avez autant d'intelligence que de beauté.*

ヴァイオレット コプト人（古代エジプト人の子孫であるエジプト人）に毎日来てもらっています。そして、あなたの弟さんと一緒にちよっと練習するのよ、アン。

アン 「アップルビー夫人に向かって」わたしの弟はアーサー卿の秘書なんです。アップルビーさんが残してきたアーサー卿と一緒だったのは弟に違いないわ。

ヴァイオレット もしそうなら、弟さんに小言を言わなけりゃ。アーサーが家族水入らずの時に邪魔しに来る権利はないって、よくよく分かっているはずなんですもの。でも、弟さんはアラビア語が素晴らしくよくできるという評判ですわ。

オスマン・パンヤ *Vous parlez de M. Parry? Je n'ai jamais connu un Anglais qui avait une telle facilité.*

アン 閣下は、ロニーほどうまく話せるイギリス人は知らないっておっしゃってるわ。

ヴァイオレット アラビア語は恐ろしく難しい言葉なの。時々、頭が混乱する気がするわ。

サイス（現サ・エルハジャル）の原住民が二人入って来る。一人はコーヒーカップを載せた銀の円形盆を持ち、もう一人は粉碎したコーヒー豆で作ったトルココーヒーの入った銀の器を載せた小さなトレーを持っている。二人は各人にコーヒーを出して回った後、黙って待っている。アーサー卿が入って来ると、コーヒーを出して出て行く。

アン めげずにやり通すなんて、あなたは素晴らしいわ。

ヴァイオレット あら、ロニーが一生懸命励ましてくれるんですもの。わたしがともうまくなっているって、あの人が言うの。わたしは本当に話せるようになりたいのよ。わたしがエジプトにどれだけ熱中しているか、思いも寄らないでしょうね。わたしはエジプトが大好きなの。

オスマン・パンヤ *Pas plus que l'Egypte vous aime, Madame.*

ヴァイオレット わたしたちがアレキサンドリアに上陸して、あの青い空とあの褐色の肌をした身ぶり豊かな群衆を見た時、わたしの胸は躍ったわ。自分が幸せになれるって分かった。そして、目を追うごとにエジプトがますます好きになったわ。わたしはエジプトの遺跡が大好き、砂漠とカイロの街とナイル川沿いのあのかわいい小さな村が大好きなの。世界にあんなに美しいものがあるなんて知らなかった。ロマンスなんて本で読むだけのものだと思ってた。ヤシの木の下に井戸があって、その側にロマンスがまるで我が家にいるみたいに座っている国があるなんて知らなかったわ。

オスマン・パシヤ Vous êtes charmante, Madame. C'est un bien beau pays. Il n'a besoin que d'une chose pour qu'on puisse y vivre.

アン 「通訳して」「ここは美しい国です。でも、住むのにふさわしくするために必要なものが一つだけあります」ですって。で、それは何なんですか、閣下？

オスマン・パシヤ La liberté.

アップルビー 自由ですと？

ヴァイオレットが最初にエジプトのことを話し始めた時に、アーサーが入って来て、寛大なほほえみを浮かべながらヴァイオレットの熱狂ぶりに聴き入っている。パシヤのセリフの時に前に進み出る。アーサー・リトルは四十五歳の男で、きびきびとした若々しい物腰をしており、非常に知的で、経験豊かな外交官としての上品さ、自信、如才なさど問題解決能力を備えている。アーサーはどんなことにでもよく気がつくが、どれだけ気がついていいるかはめったに見せない。

アーサー エジプトには成功する自由はありますね、閣下。でも、悪いことをする自由も必要でしょうか。成功したいという気持ちが失われませんか？

ヴァイオレット 「アップルビー夫人に向かって」「トルココーヒーがお嫌いじゃないといいんだけど。

アップルビー夫人 あら、そんな、好きよ。

ヴァイオレット よかった。本当においしいもの。

アーサー 閣下は家内をすっかりこの国の熱烈なファンにしてしまいました。

オスマン・パシヤ J'en suis ravi.

アーサー ロニーに入って来てお茶を飲むように言っておいたんだが。「アンに向かって」「あなたが弟さんに挨拶したいだろうと思ひましてね。

アン 今日はかなりお忙しいんですか？

アーサー 我々はいっただって忙しい。そうじゃありませんか、閣下？

オスマン・パシヤ En effet, et je vous demanderai permission de me retirer. Mon bureau m'appelle.

オスマン・パシヤは立ち上がってヴァイオレットと握手する。

ヴァイオレット 来てくださってありがとうございます。

オスマン・パシヤ Mon Dieu, Madame, c'est moi qui vous remercie de m'avoir donné l'occasion de saluer votre grâce et votre beauté.

オスマン・パシヤは一同に会釈する。アーサーがオスマン・パシヤをドアのところまで案内し、オスマン・パシヤは出て行く。

アン あなたはあんなお世辞を言われても平然としているのね、ヴァイオレット。
アーサー 「戻って来ながら」ねえ、素晴らしいオヤジだね。とても上品で、洗練された物腰をしていて、もし可能なら明日にでも我々を皆殺しにさせるなんて信じがたいね。

アップルビー あなたが彼を文部大臣にするべきだと推薦した時、イギリスではいささか不安があったのを覚えています。

アーサー イギリスでは現地の状況は必ずしも分からないものです。オスマンは保守派のイスラム教徒です。イギリス人に対する激しい憎しみを持っています。長年の間に運命を受け入れるようになりましたが、あきらめた訳ではありません。目的を見失うことは決してありません。

アップルビー で、それは？

アーサー それは、もちろん、イギリス人を海に叩き込むことです。ところが、彼は賢いオヤジで、まず最初にやるべきはエジプト人を教育することだということが分かっています。ところで、我々もまたエジプト人を教育することを望んでいます。わたしは心の中であらゆる種類の改革を考えましたが、それを厳格なイスラム教徒に受け入れさせるには、イスラム教徒から愛国心があると信じられていて、その血筋の正しさに少しも疑わしいところのない人間から持ち出してもらえないのです。

アン 信用していない人間と仕事するのはやっかいじゃありませんか？

アーサー わたしは彼を信用していない訳じゃない。彼にはある意味感心しているし、彼が心の底で本当はわたしを嫌っているからといって全然恨んではない。

アップルビー 彼があなたを嫌う理由がわかりませんね。

アーサー わたしはまだごく若かった頃に、エジプトに三年いた。その頃わたしはほんの青二才だったが、オスマンと対立するようになって、彼はわたしを毒殺しようとした。わたしは二か月間とても具合が悪かったが、回復したもののだから、彼はわたしを決して許してはいないんです。

アップルビー 何て悪い奴だ！

アーサー 彼は非国教徒の社会でもいささか場違いなんでしょう。イスマール副王の古き良き時代（一八六三〜七九年）に、彼はイスマールの妻の一人を殴り殺してナイル川に投げ込ませたんですから。

アップルビー でも、そんな性格の人間に高い地位を与えていいんですか？

アーサー それがあの時代の風習と習慣だったんです。

アップルビー 夫人 でも、彼はあなたを殺そうとしました。彼に少しも悪意を持たないんですか？

アーサー 非常に友好的にという訳にはいきませんがね、とにかく、自分の個人的な感情に注意を払う余裕のある政治家はいません。政治家の義務は丸い穴に合う丸い釘を見つけて打ち込むことですからね。

アン 彼がここに来るのはどうしてなんですか？

アーサー 彼は実に大いなる敬意を持ってヴァイオレットに憧れています。彼女がからかうと、何と、あのオヤジは彼女を崇拜するんです。イギリスの占領に彼を従わせることでは、我々の外交手腕を全部合わせたよりも、彼女の方が多くのことをやったと思いますね。

アップルビー夫人 こういう国で力を持つて、きつと素晴らしいことでしょうね。ヴァイオレット 力ですって？ あら、わたしにはそんなものないわ。でも、少しでも役に立てると思うととても誇らしい気持ちになるの。もっとやれるチャンスがあればなあと思うだけ。ここにいる間に、わたしはかなり愛国心が強くなったわ。

ロナルド・パリーが入って来る。とてもハンサムな気持ちのいいさわやかな若い男で、物腰に独特な魅力がある。

アーサー ああ、ロニーが来た。

ロニー コーヒーを一杯いただくには遅すぎましたか？

ヴァイオレット いいえ、すぐに持つて来させるわ。

ロニー 「ヴァイオレットと握手しながら」お早うございます。

ヴァイオレット こちらはパリーさん。アップルビーご夫妻よ。

ロニー 初めまして。

アーサー さあ、ロニー、その外務省的マナーは気取らなくていいんだ。アップルビーご夫妻はとも気持ちのいい人たちなんだから。

アップルビー夫人 そう思っていただけで嬉しいですわ、アーサー卿。

アーサー でも、あなたが外務省発行のスーパ券と一緒に名刺を置いて行った時は、気持ちが沈みました。

アップルビー ほんら見ろ、お前、わたしはお前に、閣下は我々のことで煩わされたくないかないだろうって言っただろ。

アーサー 実は、わたしが予想していたのは、あらゆることを知り尽くしていて、エジプトをどのように統治すればよいかをわたしに教えようというような尊大な夫婦でした。下院議員というものは悩んでいる官僚の胸に信頼感を起こさせませんから。

ヴァイオレット わたしにはあなたがアップルビーご夫妻をくつろがせようと思っっているのかどうか分かりかねるわ、アーサー。

アーサー おや、でも、わたしの失望が最高に嬉しい失望でなかったら、こんなことは言わないだろうね。

アップルビー夫人 わたしは、主人が自分でかまどに火を入れて、毎週月曜日の朝にはわたしが一週間の洗濯をするのが習慣だった頃を決して忘れません。わたしたちはあの頃から大して変わっていないと思います、二人ともね。アーサー 分かっています。招請状を出した相手があなた方で、外務省には本当に感謝しています。

アップルビー夫人　ここに来て閣下にお目にかかれるのを、わたしたちはとても楽しみにしていました。そして、リトル夫人にお目にかかれたことはわたしの心臓にも効き目がありました。こう言ってもよろしければ、奥様は春の朝のようで、見ているだけで生きる喜びを感じますわ。

ヴァイオレット　まあ、そんなことおっしゃらないで！

アーサー　家内に対して優しい気持ちを持っていただいているすべての方に対して、わたしは優しい気持ちを持ってしまいます。上エジプトで楽しく過ごして、カイロに戻ったら、我々に知らせてください。

アップルビー　わたしはこの旅行でたくさんのことを知りたいと思っています。

アーサー　あなたは驚くようなことをたくさん知ることになるかもしれません。この世には支配するために生まれてくる人種と支配されるために生まれてくる人種がいるということ、民主制が人類のあらゆる不幸に対する万能の方策ではなくて、ほかの体制と同じように単なる行政制度の一つにすぎず、それが望ましいかどうかをはっきりさせるために時間をかけた十分な試行錯誤を済ませていないということ、自由というのは普通強い者が弱い者を支配する力のことを言うということ、そして、賢明な政治家は人々に自由の実体ではなく幻想を与えるということ——手短に言えば、急進的な下院議員の心の平静にとつて非常に妨げになるに違いない多くのことをあなたは知ることになるかもしれません。

アン　その一方で、美しい我がナイル川と寺院をご覧になるでしょうね。

アーサー

そして、恐らく、そういったものを見て、世界はどんなに年を重ねても常に未成熟であるということ、そして、結局のところ、地球上で最も長続きするものは、最も長続きしそうになく思えるもの——理想であるということに気づかされるでしょう。

アップルビー　ファニー、まるでわたしたちは手に余るような仕事をお慰みにやろうとしていたみたいだ。

アップルビー夫人　まあ、でも、わたしたちは最善を尽くしますわ。わたしは算数はできませんでしたが、それでも人は救われるかもしれないって、ずっと思ってきました。さようなら、リトル夫人、わたしたちを呼んでくださってありがとうございます。

ヴァイオレット　さようなら。

普通の別れの挨拶があつて、二人はドアのところまで行く。ロニーが二人のためにドアを開ける。二人は出て行く。

ロニー　申し上げるのを忘れていました、閣下、たった今プリチャード夫人から電

話がありました、仕事の件で閣下にお目にかかれなかつたことでした。

アーサー

「苦笑いを浮かべて」さあ、今日はとても忙しくて、大変残念だが、会うのは到底無理だろうな。

ロニー

「目を輝かせて」すぐにお越しになるとおっしゃってました。

アーサー 妹がどうしてもわたしに会おうと決めたのなら、都合がいいかどうか確認の電話をするような手間は省いてもいいのだが。

アン 妹さんは断固とした方ですわ、アーサー。

アーサー 分かっている。わたしはこの国の事柄について多少なりとも権限を持っていてるが、ことクリステイーナに関してはこればかりも権限なんか持っていないんだ。あれは何が望みなんだろうか。

ヴァイオレット きつと、いいことですわ。

アーサー 誰かが至急わたしに会いたいという時は、いつだってわたしには得るものがないということは分かっている。クリステイーナが至急わたしに会いたいという時、安全なのは即刻逃げ出すことしかないんだ。

ヴァイオレット 妹さんに優しくしてちょうだい、アーサー。さもないと、妹さんはわたしに腹いせするだけでしょうから。

アーサー だとしたら、けしからん話だな？

ヴァイオレット だって、妹さんはあなたのために十年も家事を切り盛りしてきたんですよ。立派によ、いいわね。

アーサー その通りだ。あれには家の秩序と体制に対する特殊な才能がある。すべてが時計仕掛けのように進んでいたね。一銭だって無駄にはしなかったよ。わたしのために何百ポンドも貯めておいてくれた。お陰でわたしはみじめな生活を送らされてね。わたしは、家の切り盛りが上手だということほどいまましいものはないという結論に達したんだ。

ヴァイオレット だとしたら、わたしと結婚できて、あなたは何て運がいいんでしょう！ でも、妹さんにその考えを分かってもらおうなんて期待しても無理よ。とても気持ちのいいこの宿舎から妹さんを追い出すのはなかなか難しいし、妹さんの頼みごとをあなたがやろうとしない時に、妹さんがそれをわたしのせいにするのは当然ですもの。

アン あなたはとても難しい立場でやってきたのに違いないわね。

ヴァイオレット 妹さんにわたしのことを好きになってもらえるように、できるだけのことをしたわ。わたしはむしろ妹さんの居場所を不当に奪ってるような気がしたのだから。わたしがえらそうにしたいなんてちっとも思っていないことを妹さんに分かってもらおうとしたわ。

アーサー 幸い、妹はよく分かっているよ。実を言うと、妹から息子の側にいたいからエジプトに残るつもりだと言われた時、わたしはちよつと心配だったんだ。

アン ヴァイオレットのことを好きじゃないなんていう人がいたら、それはいい好かない人ですよ。

アーサー いけ好かないね。そんな奴は国外追放にするのもやぶさかじゃないね。

ロニー わたくしは仕事に戻った方がよろしいかと思えます。

アン そうだ、ロニー、荷造りを手伝いに行った方がいいかしら？

ヴァイオレット 「ロニーに向かって」どこかにいらっしやるの？

ロニー カイロを発つんです。

アン 知らなかったの？ ロニーはパリに赴任させられることになったばかりよ。
ヴァイオレット もうエジプトには戻らないの？

ヴァイオレットはこのニュースを聞いてびっくりしている。椅子の横木をぎゅっとつかむ。アーサーとアンはそのわずかな本能的な動作に気づく。

ロニー だと思いません。

ヴァイオレット でも、どうしてわたしに隠してたの？ どうして秘密にしてたの？
アーサー ねえ君、誰も秘密になんかしてないよ。わたしは——わたしはアンが君に話すだろうと思っていたんだ。

ヴァイオレット あらそう、そんなことはどうでもいいけど、ロニーはいつもわたしのためにあらゆる類のことをやってくれていたのよ。代わることを聞かされていれば、好都合だったのに。

アーサー すまなかった。今朝決まったばかりなんだ。外務省から電報をもらってね。アンには関係があるだろうと思って、ロニーを言いに行かせたんだよ。

ヴァイオレット 子供扱いは嫌。

しばし困惑がある。

アン わたしがバカだったわ。あなたに話しに来るべきだったのに。嬉しくって興奮していたものだから忘れてしまったのよ。

ヴァイオレット どうしてあなたがそんなに興奮したのか、全く分からないわ。

アン ロニーを側に置けるのは、わたしにとってとても素敵なことになるからよ。だって、わたしはもうフラットを手放してしまったから、そう度々エジプトには来れないし、ロニーとも会えなくなっていたでしょうからね。パリならしょっちゅう立ち寄ることができるわ。それに、これは昇進でしょ？ わたしは生きているうちに弟が大使になるのを見たいのよ。

ヴァイオレット ネイティブのようにアラビア語を話せることが、パリで何に役立つのか分からないわ。

アーサー ああ、そこが、いかにも外務省らしいところなんだ。省で一番のペルシャ語通はこの六年をワシントンで過ごしている。

ロニー わたくしはびっくりしました。ずっとエジプトにいるつもりでしたから。

ヴァイオレット 「落ち着きを取り戻して」パリでは大いに楽しむことでしょうね。いつ発つもの？

ロニー 明後日の船があります。アーサー卿はそれに乗った方がいいというお考えでした。

ヴァイオレット 「女主人らしさを失って」そんなにすぐだなんて！ 「立ち直って、陽気に」わたしたちはあなたがいなくて寂しくなるわ。あなたなしでどうすればいいのか、わたしには想像もつかない。「アンに向かって」わたし

がここに来てからずっと、弟さんがどんなに役に立ってくれていたか、あなたには思いも寄らないでしょうね。

ロニー そう言っていたいで、とてもありがたいです。

ヴァイオレット この人はパーティーなんかの時にとても貴重なの。だって、晩餐の時にみんながどこに座るべきか分かってるんですもの。それに、最初の頃は、わたしが間違ったことを言わないように、いつもいろんな人たちについて細かいことを教えてくれたの。

アーサー 君が間違ったことを言ってしまったとしても、かわいらしく言っただろうから、腹を立てる人はいなかったろうね。

ヴァイオレット ロニーの後任になる人は、わたしに代わって招待状を書くのを断わるんじゃないかしら。

アーサー それは必ずしもわたしの秘書の仕事じゃないからね。

ヴァイオレット ええ、でも、自分で書くのは嫌なの。それに、ロニーはわたしの筆跡をまねることができるのよ。

アーサー 君みたいにヘタに書くことはできなかったはずだが。

ヴァイオレット あら、そんな、できたわ。できなかったっけ？

ロニー 違いに気づかれないように、何とかあなたらしく書きました。

ヴァイオレット ああ、今書かなきゃいけない招待状が三十二通もあるの。

アン 印刷したカードを送ったらどうなの？

ヴァイオレット でも、手紙の方がずっと礼儀にかなってると思うわ。とにかく、わたしは人様を晩餐に招待するのに三人称を使える年にはなっていないと思うの。

ロニー アーサー卿のご用が済み次第、すぐ書きに来ますよ。

アーサー ヴァイオレットが出掛ける前に書いた方がいいな。

ヴァイオレット すぐ出掛けなきゃならないの。副王のお母様が三時半に会いに来てほしいっておっしゃって。今リストを持って来ましょうか？ クリステイーナを待つてはいられないわ。仕事のことであなたに会いたいのなら、妹さんもわたしがいない方がいいでしょうから。

アーサー 分かった。

ヴァイオレット 「ロニーに向かって」用意ができたら、ここに来てくれるかしら？

ロニー かしこまりました。

ヴァイオレットは出て行く。

アーサー 例のレポートはもう終わっているのか？

ロニー まだです、閣下。でも、十分でできます。

アーサー わたしのデスクに置いていてくれ。

ロニー かしこまりました、閣下。

退場。アーサーとアンだけが残される。アーサーは考え深げにアンを見る。

アーサー ささいなことだと思われることでも、ヴァイオレットはとても気にするんだ。

アン ごく当たり前のことじゃないの？ 気概のある子ですもの。

アーサー あの子は僕から計画を聞くのが好きでね。ほかの人たちよりも先に情報を知ること、自分もちよつとは重きを置かれていると感じるんだ。

アン ええ、当然よ。よく分かるわ。わたしだってあの子の立場なら同じことをするでしょうね。

アーサー ロニーが行くことを忘れずにあの子に話すべきだった。あの子がほんのちよつとでも腹を立てたのは、わたしがあの子に内緒で物事を決めていたと思っただけなんだ。

アン ええ、分かってるわ。親しくなった人たちの誰かが去って行くのを突然知らされたら、ちよつとぐらいあわてても当然ですもの。

アーサー 「目を輝かせて」優秀な秘書を失うことで君を責めるべきかどうか、考えているところなんだ。

アン わたしをですって？

アーサー 君の弟さんがパリで必要だなんて、どうして外務省が突然決めたのか分からないくてね。君が陰で糸を引いていたのかな？

アーサー 「ほほえみながら」あなただったら、何て疑い深い人なの！

アン アン、白状してしまえよ。
ロニーがここで型にはまったことばかりやっていると思ったの。弟がしばらく前からやってきたこと以上にやるべきことはあまりないと思えたわ。本当のことが知りたいと言うなら、弟が異動させてもらえるように、わたしは八方手を尽くしていたのよ。

アーサー それを一言も言わなかったなんて、君は何てずるいんだ！

アン 弟を不安な気持ちにさせたくなかったの。弟がパリに行きたくてしようがないのは分かっていたけど。ちゃんと決まるまでは何も言わない方がいいと思っただよ。

アーサー 君の弟がパリに行きたがっていると思うの？

アン 「受け流して」若い男なら誰だってそうでしょ。

アーサー もしわたしが違う取り決めをしたら、君の弟はがっかりするだろうか。

アン どういうこと？ 弟をここから出て行かせるためにわたしがあらゆる手段を講じたんだから、それをあなたが止めることはないでしょうに。

アーサー 「唐突に」どうして君はそんなに弟が出て行くことを望むんだ？

アンは一瞬うろたえてアーサーを見る。

アン 困るわ、そんなにはつきり訊かないで。たった今、ヴァイオレットに話したところよ。弟にはもっとすぐ行けるところにいてほしいの。パリのような所にいけば、注目される見込みがもっとたくさんあるとも思うし。

アーサー 「にっこりして」ああ、そうか、君は以前ほど頻繁にエジプトには来れなくなると言ってたね。君をエジプトに戻る気にさせるには、ロニーをここに置いておくのも意味があるかもしれないな。

アン わたしにとって、エジプトは以前と同じじゃないの。

アーサー 僕が結婚したからといって、僕たちの友情に何の違いも生じないことを僕は望んでいるんだ、アン。僕たちの友情を僕がどんなに大切にしているか分かっているよね。

アン あなたはしょっちゅうわたしに会いに来てくれたものよね。あなたはわたしに分別があるのを知っていて、あなたが気にかかっているあらゆる事柄について一緒に話し合ったものだった。わたしは嬉しかったし得意だった。もちろん、わたしたちのあの楽しい会話は、あなたが結婚したらやめなきゃいけないのは分かってたわ。この冬わたしがここに来たのは、家財道具を取りに来ただけなのよ。

アーサー 君の話を知っていると、何となく僕が君に悪いことをしているみたいになる。

アン もちろん、全然そんなことないわ。でも、ヴァイオレットにわたしが何か企んでいると思われたくないの——あなたを独占するようなことをね。あの子はわたしに対してとても感じがよかった。知れば知るほど、ますます感じよく思うの。

アーサー そう言ってくれてありがとう

アン わたしはずっとあなたに敬服してたのよ。あなたが不釣り合いじゃない娘と結婚して、わたしはとっても嬉しいの。

アーサー 僕のような年の男が十九の娘と結婚するのは冒険だったと思う。

アン それは言えるわね。でも、あなたはずっと神々から気に入られてた。あなたは素晴らしい成功を収めたのよ。

アーサー こういふ結婚は、夫の側に果てしない機転、忍耐力と包容力が必要なんだ。あなたにはヴァイオレットが心からあなたを愛しているという大きな強みがあるわ。

アーサー 美しい娘に愛されてるなんて自分で認めるのはバカな奴だけだろうな。

アン あなたはあの子を幸せにしてあげているわ。

アーサー それを成し遂げるためなら何でもするよ。結婚した当初以上に、僕はもう少しもないくらいヴァイオレットを愛してるんだ。

アン 嬉しいわ。わたしが望むのはあなたの幸せだけなんですもの。

アーサー クリステイナが来た。

アーサーがこのセリフを言うと、ドアが開いてイギリス人の執事がプリチャード夫人を案内して入って来る。プリチャード夫人は背の

高いほっそりした女で、髪の毛は白髪になりかかっているが、顔立ちがよく、姿勢がよくて、すべての動作が決断力を持っていることを示している。ただし、目的を果たすためには巧妙で断固としているが、率直で、誠実で、ユーモアを解さないこともない正直な女である。自分の身分と地位にふさわしい立派なガウンを着ている。

執事　プリチャード夫人がお越しになりました。

出て行く。

アーサー　お前だつて分かったよ、クリステイナ。責任感が家に押しかけてくるのを感じたんだ。

クリステイナ　「アーサーにキスしながら」ヴァイオレットはどう？

アーサー　かわいいよ。

クリステイナ　あの子の健康のことを訊いたのよ。

アーサー　あの子の健康は完璧だよ。

クリステイナ　あの子の年なら、みんないつだつて元気でしょうね。「アンにキスしながら」ご機嫌いかが？　で、あなたはどうかなの、お気の毒なアーサーは？

アーサー　まるで僕がリウマチで手足が不自由でよろよろしている爺さんみたいな訊き方をするね。僕の健康は絶好調だよ、どうもありがとう、それに、年の割には実に活動的さ。「クリステイナは鉢から落ちた花がテーブルの上にあるのを見ていて、それを拾い上げて元の場所に戻す。」何でそんなことするんだ？

クリステイナ　わたしはきちんとしていないのが嫌いなもの。

アーサー　僕は好きだね。

アーサーは改めて花を取り出すと、テーブルの上に置く。

クリステイナ　お兄様はオフィスにいるのだとばかり思っていたわ。

アーサー　僕が仕事をサボつてると思うのか？　ここでお前を待つ方がふさわしいと思っただ。

クリステイナ　わたしは仕事のことでは会いたかったの。

アーサー　それはお前の手紙で分かったよ。僕にひと財産作ってくれるつもりだと確信している。

アン　わたしは外でしょうか？

クリステイナ　あら、いいのよ、どうか行かないで。どんなことだつて、あなたに聞かれちゃいけない理由なんかちっともないんですから。

アーサー　やっぱり、お前は僕にひと財産作ってくれるつもりじゃないんだ。やってほしいことがあるって言うつもりだな。

クリステイナ　どうしてそう思うの？

アーサー お前が第三者にいてほしいのは、僕が断った時に、僕がひどい我がままで
ということの証人になってほしいからだろ。お前のことは分かっている、ク
リステイーナ。

クリステイーナ 「ほほえみながら」お兄様は分別がおありだから、至極もつともな
要求をお断りにはならないわ。

アーサー 聞こうじゃないか。「クリステイーナはソファアに腰を下ろす。それまでに
座っていた人たちによってクツションが乱雑になっているが、クリステイ
ーナはそれを振って広げて叩き、正しい場所に配置する。」家具のことは
放っておいてもらいたいね、クリステイーナ。

クリステイーナ 物があるべき場所がないのを見て何が楽しいんだか、わたしには分
からない。

アーサー お前は要点に入るまでが長いね。

クリステイーナ 副王が秘書と喧嘩したって聞いたの。

アーサー お前は敬服すべき女だ、クリステイーナ。ハーレムのあらゆるゴシップを
つかんでいる。

クリステイーナ 本当じゃないの？

アーサー 本当だ。だが、昼食の前に耳にしたばかりなんだ。どうしてお前の耳に入
ったんだ？

クリステイーナ そんなことどうでもよくない？ わたしには興味深い情報を聞く手
立てがあるの。

アーサー 僕は勘が鈍いのかも लेकिन、そんなことがどうしてお前の特別な興味
を引くのか分からないね。

クリステイーナ 「ほほえみながら」アーサーったら。副王はお兄様にイギリス人の
秘書を推薦してほしかったのよ。

アン 本当なの？ それは変ね。今までイギリス人の秘書なんか持ったことがな
いのに。

アーサー なかったね。

アン 素晴らしいチャンスだわ。

アーサー 我々が適材を得れば、考えられる限り最高に役に立つぞ。もしそいつが機
転が利いて思慮深くて丁重な奴なら、やがてそいつが副王に対してかなり
の影響力を持たないという理由はないな。我々が目に見えないどんな策
略にも妨害されず、副王を我々と共に誠心誠意働かせることができれば、
我々はこの国で奇跡を起こせる。

アン その仕事につく人にとって、何て素晴らしいチャンスなんでしょう！

アーサー そうだろうな。そいつがふさわしい資質を持っていれば、何を成し遂げて
も不思議じゃない。とにかく、我がイギリス本国に大いに尽くすことがで
きる素晴らしいチャンスだ。

クリステイーナ 副王はどういう人を望んでいるか、何か詳しいことを教えてくれた
の？

アーサー 当然のこととして、若い男で正々堂々と戦う立派なスポーツマンを望んでいる。アラビア語を話せるということも重要なことだ。副王が満足する能力は僕が満足する能力と比べるたら大したことはないのだが。ふさわしくない人間だとイギリスの利益に取り返しつかない損害をもたらすかもしれない。

クリステイーナ ヘンリーならびつたりだつて思わなかつた？

アーサー 思わなかつたね、クリステイーナ。

クリステイーナ あの子は若くてスポーツも得意よ。アラビア語も話せるわ。

アーサー 確かにそうだと思うが。あの子には今のポストがぴったりだと思う。仕事に慣れたばかりなのに、動かすのは気の毒だろ。

クリステイーナ アーサー、給料の安い文部省の仕事と副王の個人秘書の仕事じゃ比べものにならないわ。

アーサー 人間にとつて一番いい仕事は、その人間に一番ふさわしい仕事だよ。

クリステイーナ あの子には非の打ちどころがないわ。とてもよく働かし、誠実で勤勉で骨身を惜しまないもの。

アーサー 歩く時に違和感がないからといって、履いているブーツを褒めちやいけない。違和感なく歩けなければ、捨てるんだから。

クリステイーナ それはどういうこと？

アーサー お前の言う資質は、実際のところ、特別な報酬に値するものではない。ヘンリーにそういう資質すらなかったら、僕は一瞬もためらわずに解雇するだろうね。

クリステイーナ 間違いなく、お兄様はそのチャンスを歓迎なさるでしょうね。たまにお兄様の甥だということが、ヘンリーの人生で最大の不幸だわ。

アーサー その一方で、お前の息子であるという並外れた幸運で埋め合わせされているよ。

クリステイーナ お兄様はことごとくあの子の行く手を遮ってきたわ。

アーサー 「上機嫌だ」それは違うよ、クリステイーナ。僕はお前がしきりにやれと勧めるバカな仕事をたくさん断わってきた。あの子にもほかのみんなと同じようにチャンスはあったんだ。お前は敬服すべき母親だ。もし僕がお前の言うことに耳を貸していれば、今頃あの子は司令長官にも総理大臣にもなっていただろうよ。

クリステイーナ ヘンリーのためだからといって、わたしはお兄様に全く筋の通らないことをお願いしたことはないわ。

アーサー 何が筋が通るかということについて、我々の見解が異なるのは明らかだ。

クリステイーナ お願いよ、アン。副王にヘンリーを個人秘書として推薦することに何か支障があるかしら？

アーサー 何のためにこいつが君にいてほしいか、僕には分かってたんだ、アン、僕が頑固で強情だということの証人になつてもらうためだよ。

クリステイーナ バカなこと言わないで、アーサー。わたしはアンに公平な意見を求めているのよ。

アーサー アンが自分の何も知らないことについて貴重な意見を持つなんてことはありそうにもないが。

アン 「くすくす笑って」それって、わたしは口をつぐんでいるしかないってことをすぐく分かりやすくほめかしてるのね。わたしはそうすることにすわるわ、クリステイーナ。

クリステイーナ 理不尽よ、アーサー。どんな言い分も聴こうとしないんですもの。

アーサー お前はまだまだたった一つのことしか提案していない。目の前にいい勤め口があつて、ヘンリーが僕の甥だから、あの子にやってくれということだけだ。なあ、そんなに僕と近い身内の人間は副王が受け入れないだろうということが分からないのか？

クリステイーナ 全然納得できないわ。副王がお兄様にイギリス人の秘書を推薦してほしいと頼んだということは、副王がお兄様との関係をより親密にしたいということでしょう。何にしても、あの子にチャンスをやってくれてもいいじゃない。

アーサー 今回のチャンスを与えるような余裕のある場合じゃない。のるかそるかなんだ。もし僕が選んだ人間がダメな奴だと、副王は僕にもう二度とそういうことをしてくれとは頼まないだろう。危険を冒す訳にはいかないんだ。なにか教えてちょうだい。

アーサー よろしい。あの子がアラビア語を話せるというのはその通りだが、原住民の気持ち的理解できないんだ。文法はそういうことまでは教えてくれない。共感する気持ちだけが教えてくれるんだ。あの子が持っているのは役人根性だ。僕はよく思うんだが、お前は若い頃に固くてまっすぐな矢を飲み込んだに違いないし、かわいそうにヘンリーは心の中に物差しを持って生まれてんだってね。

クリステイーナ 面白くないわ、アーサー。

アーサー いずれあの子が有能な役人になることは疑わないが、決してそれ以上にはならないだろう。想像力に欠けているんだ。想像力は小説家に必要なものと全く同じように政治家にも必要なんだ。結局のところ、あの子には魅力がない。

クリステイーナ どうして決めるつけるの？ お兄様はあの子の伯父でしょ。わたしに魅力がないと言ってくれた方がまだましだわ。

アーサー お前にも魅力はないね。お前には女性の誉れとなるような美德がたくさんあつて敬服すべき女だが、魅力はないね。

クリステイーナ 「苦笑いを浮かべて」お兄様に褒めていただけこうなんて思ったら、バカでしょ？

アーサー とにかく、お前は経験から学ぶことができない女だった。

クリステイーナ それはともかく、お兄様には賛成できないわ。ヘンリーにだって魅力はあるもの。

アーサー 我々はどうしてあの子をヘンリーと呼ぶんだ？ ヘンリーと呼ぶのがどうしてあの子にぴったりなんだ？ あの子に魅力があれば、自然にハリーと呼ぶだろ。

クリステイーナ 全く、アーサー、お兄様のような立場の人がそんなバカバカしい些細なことに影響されるなんておかしいわ。若い子がしっかりと真の美德をたくさん持っているのに、お兄様の考えで、魅力なんていう取るに足らない何だかよく分からない長所を持っていないからといって、勤め口に推薦するのを断わるなんて、不公平よ。

アーサー 何だかよく分からないものかもしれないが、取るに足らないものでないのは確かだ。本当だ、魅力というものはどんな人間だって持つことができる一番価値の高い長所なんだ。魅力というものが頭脳や美德の欠如の埋め合わせをすると言ったら不道徳に聞こえると思うか？ 悲しいかな！ たまたま本当のことなんだ。頭脳のおかげで力を持つのもかもしれないが、魅力によって力を持ち続けることができる。魅力がなければ部下を指揮することは絶対にできないぞ。

クリステイーナ それで、若いイギリス人で、スポーツマンで、アラビア語に堪能で、機転が利いて、想像力があって、共感できる気持ちを持っていて、分別があつて、礼儀正しくて、魅力のある人を見つけられそうだと思うの？

アン もし見つけられそうだと思うのなら、アーサー、その人はここにあまり長くはいないんじゃないかしら、なぜなら、言つとくけど、何としてもわたしがその人と結婚するからよ。

アーサー そう言われても怖くはないね。僕はロニーを提案しようと思うんだ。

クリステイーナ 「びっくりして」ロナルド・パリーですって！ お兄様が最も提案しそうな人だわ。

アーサー 「鋭く」どうして？

アン 「うるたえて」本気じゃないわよね、アーサー？

アーサー どうして？

クリステイーナ 「アンに向かって」知らなかったの？

アン 最も頭に浮かばなかったことよ。

クリステイーナ お兄様はあの人が出て行く手筈をすっかり整えたんだと思つてたわ。

アーサー 手筈なんか全然整えちゃいない。外務省から彼をパリに転勤させるという電報を受け取っただけだ。

アン 「ほんの短い間を置いて」言われた通りにした方がいいとは思わないの？

アーサー いや、思わないね。ロンドンに電報を打って、状況を説明して、たった今浮上してきたばかりのポストには、彼が非常にふさわしいと思うと言うつもりだ。

アン 「軽く受け止めようとしながら」あの子をパリに転勤させてもらうために、あらゆる手立てを尽くした後だから、わたしはむしろいい気持ちはしないわ。

クリステイーナ あら、あれはあなたのお陰だったのね？ あなたは彼がここを出た方がいいと思っただけなの？

アーサー 「承知の上で」お前が何を言おうとしているのか、僕にはさっぱり分かんよ。

クリステイーナ 「アーサーに反抗的に応じて」ロナルド・パリーほどふさわしくない人なんて想像もできないわ。

アーサー それは僕が決めることだろ？

アン 多分、外務省は考えを変えなきゃいけない理由が分からないって言うでしょうね。

アーサー そうは思わないな。

アン ロニーには話したの？

アーサー いや、副王が彼を受け入れるかどうか見極めるまでその必要はないと思っ
てね。

クリステイーナ びっくりよ、アーサー。ヘンリーからロナルド・パリーがパリに行くって聞いた時、とても望ましいことだって思わない訳にはいかなかったわ。

アーサー どうして？

クリステイーナはアーサーを見て、話しそうになるが、躊躇する。
勇気がなくて黙っていようと決心する。アンが助け舟を出す。

アン クリステイーナには分かっているのよ、わたしは今後ほとんどエジプトに
来ないし、ロニーとわたしがお互いをどれだけ好きかってことをね。わた
したちがお互いにできるだけ近いところにいると思うのは当然のこと
ですもの。

クリステイーナ 「くすくす笑って」お兄様がロナルド・パリーにいい勤め口を与え
ようと決めたからといって、ヘンリーにそれを与えるのを断わるなんて、
全くおかしいわ。

アーサーは意図的にクリステイーナに詰め寄って面と向かう。

アーサー 彼に反対の理由があるんなら、言えよ。

二人は一瞬黙ってお互いを見つめ合う。

クリステイーナ お兄様に反対の理由が何も無いんなら、わたしにもないわ。

アーサー よろしい。今日の午後はやるのがたくさんあるんだ。もう僕に言いたい
ことがないんなら、仕事に戻りたいんだが。

クリステイーナ 分かったわ、わたしも帰ります。

アーサー ここにいてヴァイオレットに会うんじゃないのか？

クリステイナ そのつもりはないわ、ありがとう。

クリステイナは出て行く。アーサーはクリステイナのためにドアを開ける。

アン どうしてさつき話してくださらなかったの、ロニーをカイロに留まらせることに決めたって？

アーサー すべてが決まるまで、その必要はないと思ったんだ。君は黙っていてくれるだろうね。

アン 決心は変わらないの？

アーサー 変わらない。

二人はお互いをじっと見る。

アン わたしは自分の部屋に戻るわ。昼食の後は昔からの習慣を守ってお昼寝することにするの。

アーサー ヴアイオレットにもそうさせることができるといいんだが。

アン あの子はとても若いから、まだその必要を感じないのよ。

アーサー そうだな、あの子はとても若い。

アンは出て行く。アーサーは一瞬たまらなくなって気がくじける。年老いて疲れたと感じる。しかし、足音を聞いて気を取り直す。ヴアイオレットが部屋に入って来る時には、アーサーは陽気でさっそうとしてユーモアのあるいつもの彼に戻っている。

ヴアイオレット クリステイナが車で出て行くのが見えたわ。妹さんの望みは何だったの？

アーサー 地球だよ。

ヴアイオレット 上げたんでしょ。

アーサー いや、ちょうど今君のために月を手に入れようとしているところなんだ、ダーリン、それに、もし妹に地球をやったら、実際ちよつとばかり宇宙をあわてさせすぎるだろうと思ってるね。

ヴアイオレット わたしは身支度をする前にこの招待状を片づけた方がいいと思ったの。

アーサー 副王の母上とお茶をしに行くのにはほかのワンピースを着て行くつもりじゃないよね？ そのままで魅力的なのに。

ヴアイオレット これじゃちよつと若すぎると思うわ。午前中は大丈夫だったけど。

アーサー もちろん、午後の方が年は取ってる、それは全然間違ってる。

ヴアイオレット 今、ロニーがいなくても構わないかしら？

アーサー 「一瞬間を置いてから」ああ、すぐ君のところに来させるよ。

ヴァイオレット 「アーサーが出て行く時に」お茶を出す時間には間に合うように帰りますから。

アーサー それは大変結構だ。それまで、さようなら。

アーサーは出て行く。ヴァイオレットは瞑想にふける。ロニーが入って来ると、ちよつとはっとする。

ヴァイオレット 何かとても重要なことをやっていたのに、無理に外させたんじゃないといいけど。

ロニー 実につまらないレポートをタイプしていただけです。ちょうど終わったところでした。

ヴァイオレット もし都合が悪いなら、わたしのことなんかかまっちゃいけないわ、いいこと。

ロニー そういう機会は持てなくなるでしょうね？

ヴァイオレット そうね……。見て、リストよ。

ヴァイオレットは名前を走り書きした紙を一枚ロニーに手渡し、ロニーはそれを読む。

ロニー かなり退屈なパーティーみたいじゃないですか。僕の名前を取り消してありますね。

ヴァイオレット あなたがここにいないのに呼んでも無駄ですもの。あなたの代わりに誰を呼んだらいいかしら？

ロニー 分かりません。僕の代わりに誰かを呼ぶなんていう考え方は嫌いです。すぐ取りかかりますか？

ヴァイオレット 構わなければ。わたしは出掛けなければならないのよね。

ロニーはライティング・テーブルに着く。

ロニー 特に好きな人たちから始めます。

ヴァイオレット 「くすくす笑って」アーサーからフォン・シードレン夫妻を呼ばなきゃいけないって言われた時、丁重な手紙を出すのがどんなに嫌だったか、覚えてない？

ロニー 「書きながら」「親愛なるシンクレア夫人」。

ヴァイオレット そうだ、エブリンって呼ぶように言われてたわ。

ロニー くそっ、書き直さなきゃ。

ヴァイオレット 太ったオバサンたちを名字じゃなくて名前で呼ぶと、いつも気持ち悪くなるわ。

ロニー 「心を込めて」で締めくくりますか？

ヴァイオレット あなたはバリに行くことを考えてひどく興奮してるんでしょうね？

ロニー　いいえ。

ヴァイオレット　あなたにとつては昇進なのよね？　わたし……わたし、あなたにお祝いを言わなきゃ。

ロニー　僕が行きたがっているなんて思ってる訳じゃないですよね？　僕は行きたくないんだ。

ヴァイオレット　どうして？

ロニー　僕はここでとても幸せでした。

ヴァイオレット　一生ここに留まっていることなんかできないのは分かってたでしょ。

ロニー　どうしてできないんですか？

ヴァイオレット　「努めて自分を抑えながら」リストの次の人は誰なの？

ロニー　「リストを見ながら」あなたは僕がいなくなってもちっとも寂しくないんですか？

ヴァイオレット　最初の内は寂しいでしょうね。

ロニー　そんなふうにするのはあまり思いやりがあるとは言えないな。

ヴァイオレット　思いやりがないって言うの？　そんなつもりはないわ、ロニー。

ロニー　ああ、僕はとてもみじめだ。

ヴァイオレットはちよつと叫び声を上げてロニーを見る。両手を自分の胸に押し付ける。

ヴァイオレット　手紙を続けましょうよ。

ロニーは黙って書く。ヴァイオレットはロニーに注目しないで、どうしようもなく空を見つめる。すすり泣きを抑えることができない。

ロニー　泣いていますね。

ヴァイオレット　いいえ、泣いてなんかいない。泣いてなんかいないわ。絶対に泣いてなんかいない。「ロニーは立ち上がってヴァイオレットのところまで行く。ロニーはヴァイオレットの目をのぞき込む。」あまり突然なんでもの。あなたが行ってしまふなんて、夢にも思わなかったわ。

ロニー　ああ、ヴァイオレット！

ヴァイオレット　そんなふうには呼ばないで。お願いだから、やめて。

ロニー　僕が愛してるのを知ってたかい？

ヴァイオレット　どうしてわたしに分かるの？　ああ、わたしはとっても不幸だわ。こんなことになるなんて、わたしが何をしたらというの？

ロニー　君を愛さずにはいられなかったんだ。もう君に言っても構うもんか。全部おしまいなんだから。君に知らせないまま行きたくないんだ。愛してる。愛してるんだ。愛してるんだよ。

ヴァイオレット　ああ、ロニー！

ロニー この何か月かはとても素晴らしかった。君ほどの人は知らなかった。君の言うことすべてが僕の喜びだった。君の歩き方、そして君の笑い声、それに君の声を僕は愛してた。

ヴァイオレット ああ、やめて！

ロニー 君を見て、君と話して、君がすぐそこに、僕の側にいると分かるだけで、僕は満足だった。君は僕を限りなく幸せにしてくれたんだ。

ヴァイオレット わたしが？ ああ、とても嬉しいわ。

ロニー 僕は自分を抑えることができなかった。君のことを考えないようにしようとしたんだけど。僕のことを怒ってないよね？

ヴァイオレット 怒るはずがないわ。ああ、ロニー、わたしにだってそういうみじめな思いをした経験はあったもの。でも、出し抜けに起こったものだから、何が起きているのか分からなかったの。あなたのことが好きなだけなんだと思っただわ。

ロニー ああ、愛しい人！ こんなことがあり得るんだろうか……？

ヴァイオレット そして、そう思った時——ああ、わたしはとても怖かったの。顔に書いてあるに違いない、みんなに分かるに違いないって思った。間違っただとだと分かってたし。いけないことだと分かってたけど。自分を抑えることができなかったのよ。

ロニー ああ、言っておくれ、ヴァイオレット。君が言うのを聞きたいんだ。「愛してる」って。

ヴァイオレット 愛してるわ。「ロニーはヴァイオレットの前に跪いてヴァイオレットの手にキスを浴びせる。」ああ、やめて、やめてちょうだい！

ロニー 愛しい人。本当に愛しい人。

ヴァイオレット わたしは何をしてしまったのかしら？ 誰にも知られないようにしよう決めていたのに。それなら構わないと思ってた。それだったらわたしがアーサーに対して義務を果たす妨げにならないで済むんですもの。あの人に対する愛情の妨げにはならなかったわ。あなたへの愛をしっかりと心の中に閉じ込めておけば、誰も傷つけることはないと思っていたから、わたしはとても幸せだった。それで嬉しかったの。

ロニー 知らなかった。僕は君が僕に言う一言一言の重みを考えてばかりいた。君はそんな素振りを全然見せてくれなかったからね。

ヴァイオレット あなたを愛するほど誰かを愛することができるなんて、知らなかったわ、ロニー。

ロニー 愛しい人！

ヴァイオレット ああ、わたしにそんなこと言わないで。悲しくなるわ。あなたが行ってしまふことで動揺さえしていなければ、わたしは絶対に話さなかったわ。あなたが行ってしまったという思いに慣れる時間をもらえさえすれば、わたしは……わたしはバカな真似はしなかったのに。

ロニー 僕にほんのちよつとばかり慰めをくれるのを惜しんじやいけないよ。

ヴァイオレット　でも、すべてがあまりにも突然だったんですもの、あなたが行ってしまうという知らせとあなたの出発が。耐えられないと思った。どうしてわたしに時間をくれなかったのかしら？

ロニー　泣かないで、愛しい人、苦しくなる。

ヴァイオレット　二人だけでいられるのはこれが最後よ、ロニー。何のこだわりもなくあなたを行かせることはできない……ああ、神様、耐えられないわ。

ロニー　僕たちが一緒だったとしても幸せだったろうね、ヴァイオレット。どうしてもっと早く逢わなかったんだろ？　僕たちはお互いのために生まれてきたんだと思う。

ヴァイオレット　ああ、そんなこと言わないで。わたしが自分に言わなかったでも思うの、「ああ、最初にあの人に逢ってさえいれば」って？　ああ、ロニー、ロニー、ロニー！

ロニー　君が僕を愛してくれてるって思う勇気がなかったんだ。行ってしまわなきゃならないと思うと気が狂いそう。今君を置いて行くと思うとぞつとずるよ。

ヴァイオレット　いいえ、この方がいいのよ。こんなふう続けることはできなかったもの。あなたが行ってしまったってくれるのは嬉しいわ。胸が張り裂けそうだけ。

ロニー　ああ、ヴァイオレット、どうして僕のことを待ってくれなかったんだ？　ヴァイオレット　わたしは間違いを犯したの。その償いはしなければならぬわ。アーサーはとも優しくもいい人なの。わたしのことを心の底から愛しているわ。ああ、わたしは何てバカだったの！　愛がどういものか知らなかったのよ。わたしの人生は終わりだと思う、わたしはまだ若いのに、ロニー。

ロニー　君のためだったら、僕は何でもするからね。

ヴァイオレット　愛しい人。「二人は向かい合って立ち、物思わしげに悲しそうに互いを見る。」無駄よ、ロニー、わたしたちは二人とも自らをすっかりみじめにしているのよ。わたしにさようならを言ってちょうだい、それで、別れましょ。「ロニーはヴァイオレットを引き寄せる。」ダメ、キスしないで。キスしてほしくないの。「ロニーはヴァイオレットを腕に抱いて情熱的にキスする。」ああ、ロニー、すごく愛してるわ。「やっとのことでヴァイオレットはロニーを振り払う。ぐつたりと椅子に腰を下ろす。ロニーはヴァイオレットのところに向かって動く。」ダメ、もう側に来ないで。とつても疲れたわ。

ロニーはヴァイオレットをちよつと見てからテーブルに戻って行き、腰を下ろして手紙を書く。ゆつくりと二人の目が合う。

ロニー　それじゃ、さようならだね？

ヴァイオレット　さようならね。

ヴァイオレットは痛みが耐えがたいかのように両手を胸に押し当てる。ロニーは両手で頭を抱え込む。

第一幕終わり

第二幕

領事代理公邸の庭。ヤシの木、モクレン、ツツジの花が咲く茂みのある東洋風の庭である。片一方にコーランの一節で飾られたアラビア風の古い井戸の覆いがある。一本の黄色いツルバラが上の鉄の部分を横切って生えている。バラの木々が満開になっている。もう一方には柳の枝で編んだ安楽椅子がいくつかとテーブルが一つある。庭のはずれをナイル川が流れており、川の向こう側にはヤシの並木と東洋らしい空がある。夕方近くで、この幕の間に太陽がだんだんと沈んでいく。

テーブルには茶器が並んでいる。アンが座って本を読んでいる。脚が褐色で、青いギャバジンを着てエジプト人労働者の小さな丸い帽子を被った庭師が、花に水をまいている。クリステイーナが入って来る。

アン 「見上げながら、にっこりして」あら、クリステイーナ！

クリステイーナ あなたがここにいて聞いて聞いたものだから。ヴァイオレットに会いに来ただけで、まだ戻っていないって言われたわ。

アン 副王のお母様に会いに行つてるところよ。

クリステイーナ わたしは待とうと思うの。

アン お茶はいかが？ わたしもヴァイオレットが戻るまでと思つて待つていたの。彼女は、甘いものをさんざん食べさせられて、口直しにお茶が一杯ほしいだろうと思つてね。

クリステイーナ いいのよ、わたしには持つて来させなくても……。随分長いこと自分か女主人だった家でお客として扱われるのは本当にショックだわ。「庭師に向かって」Imshi. (出て行ってちょうだい。)

庭師 Détak sa'ideh. (楽しい夜を。)

庭師は出て行く。

アン あなたのアラビア語の知識は結構うわべだけなのね、クリステイーナ。

クリステイーナ わざわざ知らない言葉を使わなきゃいけない理由が分からないわ。

外国人がわたしに話しかけたいなら、英語で話しかければいいのよ。

アン でも、自分の国を出たら、わたしたちが外国人だわ。

クリステイーナ バカ言わないで、アン、わたしたちはイギリス人よ。ヴァイオレットがアラビア語を習うのをアーサーが許しているなんて不思議。原住民に悪いイメージを与えろと思えないわ。わたしなんか、アラビア語の単語は五十だけでこの家を切り盛りしてたのに。

アン 「ほえみながら」あなたなら百語で国を切り盛りする気になれるって、わたしは確信してるわ。

クリステイーナ あなただって、わたしがここで自分の仕事をきっちりやってたことは否定できないと思うの。

アン あなたは素晴らしい管理人だわ。

クリステイーナ わたしには常識と組織化する才能があるの。「唇をすぼめながら」今のこのやり方を見ると胸が張り裂けそうになるわ。

アン ヴァイオレットがとても若いっていうことを忘れちゃいけないわ。

クリステイーナ アーサーにふさわしい妻になるには若すぎるわ。

アン 彼はとっても満足しているみたいだし、何と言っても、彼が一番の当事者ですもの。

クリステイーナ 分かってるけど。兄ののぼせ上り方といったら——盲目的だと思うわ。ない？

アン 「冷静に」お互いに深く愛し合っている二人を見るのはとても楽しいことだわ。

クリステイーナ わたしがあなたのことをすごく妬んでいたのをご存じ、アン？

アン 「面白がって」あなたがわたしのことをことごとく嫌っていたのは知ってるわ、クリステイーナ。あなたはそれをあえて隠そうともしなかった。

クリステイーナ わたしはアーサーがあなたと結婚するんじゃないかってずっと心配だった。この家から追い出されなくなかったもの。わたしのことをひどい女だと思うでしょ。

アン いいえ、ごく当然なことだと思うわ。

クリステイーナ わたしにはどうしてアーサーが結婚しなきゃならないのか分からなかった。わたしが家庭生活の快適さをすべて与えていたんですもの。結婚は兄の仕事の邪魔になると思ったわ。もちろん、兄があなたのことを好きなのは知ってたけど。兄があなたと食事するためにそっと出て行く時、わたしは苦しんだわ。「鼻をすすって」兄はそれで休まると言ってた。

アン 多分、そうだったでしょうね。あなたは行かせたくなかったの？

クリステイーナ あなたがどうしようもないくらい兄を愛してるのは知ってたの。

アン 今それをわたしの前で言う必要があるかしら？ 実際、わたしはそれに値しなかったのに。

クリステイーナ あのね、わたしは兄があなたと結婚したらよかったと思うの。兄が二十も年下の娘と結婚するなんて、思ってもみなかったわ。

アン あの人はわたしのことを友達としてしか見てなかった。わたしの気持ちは違うかもしれないなんて、あの人は一瞬たりとも思いつかなかったでしょうね。

クリステイーナ わたしがバカだったのよ。兄にそれとなく言ってあげるべきだったわ。

アン 「にっこりして」あなたはそうしないように用心してたけどね、クリステイーナ。多分、必要なのはそうすることだけだって、あなたは分かったのよ。

クリステイーナ 「考え深げに」兄はあなたにちゃんとした扱いをしなかったと思うの。

アン バカバカしい。女に愛しされてるからといって、殿方に結婚する義務はないわ。愛してるからといって相手を求める権利が与えられる理由も分からないし。

クリステイーナ あなたなら素晴らしい奥さんになったでしょうね。

アン ヴァイオレットもそうなるわ。大抵の殿方はふさわしい妻を持つものよ。

クリステイーナ あなたが彼女に親切なのが不思議だわ。あなたはとても寛容で思いやりがあるから、誰も彼女があなたからこの世で一番欲しい物を盗ったなんて想像もつかないでしょうね。

アン もしほんのちよつとでも彼女に恨みを抱いたら、わたしはあまり自尊心を持ってないでしょうね。彼女が優しく魅力的で純真で、わたしはとても嬉しいの。だからごく簡単に好きになれるのよ。

クリステイーナ 分かってるわ。わたしは彼女を嫌いになりたかったの。でも、実際はなれなかった。彼女には何か人の心を和らげるものがあるもの。

アン 好都合なんじゃないの？ 難しい立場ですもの。彼女のあの抵抗しがたい魅力はすべてを可能にするわ。とにかく、アーサーに幸せになってもらいたいという点で、あなたとわたしは意見が一致しているわ。

クリステイーナ その可能性は高いかしら。

アンが一瞬不審そうにクリステイーナを見ると、クリステイーナは冷ややかに見つめ返す。

アン どうしてあなたは今日の午後ここに来たの、クリステイーナ？

クリステイーナ 「かすかにほほんで」どうしてあなたはさんざん苦労してまで弟さんをパリに転勤させたの？

アン あら、今朝お話ししたでしょ。

クリステイーナ わたしに知らないふりをする必要があるっていうの？

アン わたしにはさっぱり分からないわ。

クリステイーナ そうかしら？ あなたがロニーをエジプトから出したいのは、彼がヴァイオレットを愛してるのを知ってるからよ。

一瞬、アンはちよつとばかり驚くが、すぐに立ち直る。

アン あの子どもはとて恋に陥りやすいの。しよつちゅう恋しては冷めてを繰り返しているのよ。あの子がヴァイオレットに惹かれてるのに気づいたから、正直に言うと、危険な道からは外した方がいいと思ったのよ。

クリステイナー あなたは何てずるいの、アン！ 話している相手が知っていると確信するまでは一切認めようとしません。ヴァイオレットも同じくらい彼を愛していることは、あなただってわたしと同じくらい分かっているくせに。

アン 「かなり動揺して」クリステイナー、あなたはどうするつもりなの？ どうしたら分からずに済んだっていうの？ 二人がお互いを見る様子を見ているだけで分かるわ。二人とも恋の病にかかっているのよ。

クリステイナー アーサーはどうするつもりだったのかしら？ あれほど見事にお似合いのカップルは見ることがないけど。

アン 今朝、あなたがアーサーに話していた時まで、わたし以外は誰も知らないと思ってたわ。あの時、あなたも知っているに違いないと思ったの。心臓が口から出そうだった、あなたが彼に話すつもりじゃないかと思ってね。でも、あなたは話さなかったから、わたしが間違っていたと思ったわ。

クリステイナー わたしに思いやりの気持ちがあるなんて、あなたは信じてなかったのね、アン。わたしが嫌な人間らしく振る舞わなかったから、あなたはわたしのことを全くのバカに違うなと思っただわ。

アン あなたが息子さんをどれだけ熱愛してるか、わたしには分かっている。息子さんの利益が問題になっている時に、あなたなら何事もためらわないと思っただの。ごめんなさい、クリステイナー。

クリステイナー どうか、謝ったりしない。自分でもそれが分からなかったの。アーサーに話そうと口まで出かかっていただけ、とても言えなかった。そんな卑劣なことではできなかったわ。

アン ああ、クリステイナー、わたしたちは絶対あの人に知らせちゃいけない、あの人をみじめな気持ちにさせちゃいけないのよ。そんなことしたら、あの人の胸はずたずたになるわ。

クリステイナー じゃあ、どうすればいいの？

アン 分からないわ。ずっと頭を悩ましてきたけど。何も思い浮かばないの。何事でもうまく収めてきたわたしだけ。今度ばかりはお手あげだわ。ロニーのところへ行って、ここに留まるような仕事はどんなものでも断るよう頼もうとさえ思った。でも、アーサーはあの仕事をとても重要だと考えているし。あの人はロニーに出て行く理由がなければ受け入れろって言い張るでしょう——それを何て言えればいいのか？

クリステイナー 議論の余地がないのでなければってことね。うちの子がロニーのせいであんな素晴らしいチャンスを奪われるなんてあんまりだと思わ。あなたの弟さんがいなければ、アーサーがその仕事をヘンリーに与えるのは確かだわ。

アン 「如才なく」あの人はヘンリーの能力を最高に買っているものね。

クリステイナー わたしがじっとしたまま物事を先へ進ませるなんて思わないでね。

アン アーサーは全く気づいていないわ。あの人がヴァイオレットを愛してると同じくらいヴァイオレットもあの人を愛してると思っているのよ。あなただってあの人に何かをほのめかすほど残酷にはなれないはずよ。

クリステイーナ あなたはどれだけ兄を熱愛してるの、アン！ 心配しなくていいのよ。一言だってアーサーに言うつもりはないから。わたしはヴァイオレットに話すつもりなの。

アン 「びっくりして」何を言うつもりなの？

クリステイーナ 例の仕事へンリーに与えるように、全力でアーサーを説得してくれて頼むつもりなの。そうなれば、ロニーもパリへ行けるわ。

アン あなたは知ってるって言うつもりじゃないわよね？

クリステイーナ 「慎重に」もし必要なら、ロニーが指名を断わるようにヴァイオレットに説得させるのよ。ロニーはアーサーが了承してくれるような口実を何かでつち上げなきゃならないわね。

アン でも、それじゃ脅迫だわ。

クリステイーナ 何だろうと、わたしは構わないわ。

ヴァイオレットが入って来る。美しくしてシンプルだが、出掛けていた訪問には不足のないエレガントなアフタヌーン・ガウンを着ている。大きな帽子を被っているが、すぐに脱ぐ。

アン ヴァイオレットだわ。

ヴァイオレット あらまあ、お気の毒に、まだお茶を召し上がってなかったの？

アン あなたが戻るまで待つてようと思ってるね。今すぐ出すわ。

ヴァイオレット ご機嫌いかが、クリステイーナ？ ヘンリーはどうしてるの？ 「二人はキスし合う。」何日も見てないけど。

クリステイーナ じきわたしを迎えに来るわ。

ヴァイオレット わたしのことを無視してるのねって、あの人に言うつもり。親戚の中で少なからず気がかりのはあの人だけなの。

クリステイーナ あの子はいい子よ。

ヴァイオレット いいお母様をお持ちだわ。自分より何歳か年上の甥を持つていうのは随分おかしなことだろうとは思ってたけど、あの子はわたしのことを伯母として扱ってくれないの。わたしのことをヴァイオレットと呼ぶのよ。もつと敬わなきゃいけないって、あの人に言ってるの。

そうこうしている内に、召使たちがお茶を持って来る。

クリステイーナ 今日の午後は何をしていたの？

ヴァイオレット 副王のお母様に会いに行きました。十七も違ったものを食べさせられて、全くヘビのボアみたいな気持ちなの。「ケーキとスコーンを見ながら」あまりいいお茶がなくてごめんなさい。

クリステイーナ わたしもそう思うわ。

ヴァイオレット 「にっこりして」あなたに注いでもらう訳にはいかないでしょうね。

クリステイーナ 「満足して」構わないわ、あなたがお望みなら。

クリステイーナはティーポットの前に座ってカップにお茶を注ぐ。

アーサーが入って来る。

アーサー やあ、クリステイーナ、お前がお茶を注いでいるのか？

クリステイーナ ヴァイオレットに頼まれたものだから。

ヴァイオレット わたしさえここにいなければ、全く昔みたいでしょうね。

アーサー 君が僕に会いたいのは分かってるよ、ヴァイオレット。

ヴァイオレット あらまあ、あなたがわざわざここに出て来たんじゃないといいけど。

都合のいい時にお話しをしたというメッセージは送ったけど、せかすつもりはなかったのよ。わたしはいつでもあなたのところに行けたんですもの。

アーサー その言い方だととても大変なことみたいだね。僕がサインする手紙の準備をしてもらっている間、ちよつと時間が空いただけなんだ。でも、何にしても、いつだって何なりと言ってくれていいんだよ。

ヴァイオレット アブドウル・セッドという人のことについてあなたにお話しするよ
う、副王のお母様に頼まれたの。

アーサー そうだったのか！

ヴァイオレット 副王のお母様のお考えでは、わたしがあなたに事情を説明すれば：
…。

アーサー 「遮って」そいつは副王の母上とどういう関係にあるんだ？

ヴァイオレット ナイル川上流にある副王のお母様の所有地で長年雇われているんですって。その人の母親は副王のお母様のメイドなんです。そのメイドが結婚する時に、副王のお母様は持参金を出してあげたらしいわ。

アーサー 「ほほえみながら」分かった。アブドウル・セッドはどこかしらで強い影響力を持っているんだろう。

クリステイーナ 誰なの、その人、アーサー？

アーサー そいつは殺人で死刑を宣告されているんだ。実に分かりやすい事件だったが、嘘の証言がたくさんあって、有罪判決を勝ち取るのにいささか苦労したよ。王妃は君にどうしろと？

ヴァイオレット 何から何まで説明してください、あなたとの間をとりなしてくれないかって頼まれたの。わたしはできるだけのことはしますって約束したわ。

アーサー 君はそんなことするべきじゃなかった。この件が君の仕事じゃないことは、あのオバサンも重々承知しているはずだ。そう言えばよかったのに。

ヴァイオレット アーサー、わたしに何ができたっていうの？ その人の奥さんがそこにいたし、お母さんもいたのよ。あなたがあの人たちに会っていたら：

…あの人たちの窮状を見て何もしないなんて、耐えられなかった。本当のことが全部分かれば、あなただってあの人の刑の執行を猶予するだろうって、わたしは言ったの。

アーサー 僕にはそういうことをする権限がないんだ。特赦する権限は副王が持っている。

ヴァイオレット 分かっているけど、あなたが副王にその権限を行使するように勧めれば、副王はそうするわ。副王はこの上なくそうしたいと思っているけど、あなたのアドバイスがなければ動かないのよ。

アーサー こんなふうに君を利用しようとするなんて、王妃もひどいもんだ。君に完璧な罠を用意していたんだ。

アン 本当のところ、あの人は何をしたの？

アーサー いささか特殊な事件なんだ。アブドウル・セッドがアメリカ人の商人と意見の食い違いがあって、そのすぐ後に一人息子が病気になって死んだ。あいつはそのアメリカ人に災難をもたらす魔力のある目で睨まれたと思いつ込み、銃を手にとるとチャンスがうかがって、そのアメリカ人を撃ち殺したんだ。あの男は普通の意味で言う犯罪者ではないが、例外を作ることにはできない。もし例外を作れば、同じ言い訳をする殺人者が続出することだろう。今日の午前中、この事件を調べたが、裁判の過程に干渉しよう副王に勧める理由は見当たらぬ。

ヴァイオレット 今日の午前中ですって？ 昼食に入って来て、機嫌よく笑いながらわたしをからかっていた時、あなたは人を死に追いやっただばかりだったの？ 何て冷淡なの！

アーサー そんなふうに思われるのは残念だ。僕はどんな事柄にも細心の注意を払っているが、精一杯の力で解決したら忘れてしまうんだ。医者が患者の苦しみによって左右されることが賢明でないのと同じように、僕がそれによって左右されることは賢明でないと思うからね。

ヴァイオレット あの気の毒な人が無知で愚かだからといって殺すのは恐ろしいことのように思えるわ。あなたご自身はそれが分からないの？

アーサー 僕がここにいるのは、自分の感情に従って法を解釈するためではなくて、法の精神そのもので解釈するためではないだろうか。

ヴァイオレット いずれにしる、あなたが何の感情も持ち合わせていないのなら、そんなふうに言うのは簡単だわ。自分は本当に正しい行動をしているだけだと思っていたことが理由で死刑を宣告されるあの人のみじめさが分からないの？ あなたもあのかわいそうな女性たちの苦悩を見ればよかったんだわ。今、あの人たちが多少なりとも幸せなのは、わたしが力になるって約束したからなのよ。わたしはあなたに対する影響力を持っているって、王妃があの人たちに言ってたわ。王妃にちよつとでも知られたら！

アーサー 君をそんな立場に置くべきじゃなかった。全く不当だった。そういうことが二度と起こらないように注意するよ。

ヴァイオレット あなたは何もしないって言うつもりなの？ もう一度検討することすらしないの——ちよつとは同情心を持って？

アーサー できないね！

ヴァイオレット これは初めてわたしがあなたにお願いすることなのよ、アーサー。アーサー 分かっている。ただただ残念だが、断らざるを得ないね。

ヴァイオレット これはわたしたちの結婚以来、エジプトで初めての死刑宣告なのよ。

人の命を救ったと思えることがわたしにとってどんな意味を持つかわからないの？ 副王は執行猶予の令状にサインするのを待っているわ。あなたからの一言が必要だけなのよ。それを言う気はないの？ あのかわいそうな女性たちの感謝はわたしたちへの天の恵みかもしれないと思うの。

アーサー ねえ君、僕の義務は非常にはつきりしていると思う。僕はそれを果たさなきゃならないんだ。

ヴァイオレット はつきりしているのは、ああいう悲しみがすべてあなたにとって何の意味も持たないからだわ。自分が会ったこともない人が首をくくられるとしても、何を気にするのかっていうことよね？ 自分に影響を与える事柄であなたの言う義務を果たすのはそんなに簡単なことかしら。もしそれがあなたにとって苦しみとか、あるいは幸せを意味するとしたら。気にならなければ、義務を果たすのは簡単なことよね。

アーサー 君は全く正しい。それは一つの試金石だ。後生大事に持っているものをすべて失うことになる時に義務を果たせるかどうかのね。

ヴァイオレット あなたがそういう立場に置かれることを望むわ。

アーサー 「くすくす笑って」ねえ、君の言い方だと、まるで正反対のことを望んでいるみたいだね。

ヴァイオレット 王妃に手紙を書いて、「わたくしが全く間違っておりまして。わたくしは夫に対してシェフ・アード・ホテルの旅行者ほどの影響力も持ち合わせておりません」って言わなきゃいけないかしら？

アーサー 君は何も書かない方がいい。君が恥をかかないで済むようなメッセージを僕が伝えさせるよ。

ヴァイオレット 「冷たく」あなたにはお仕事がたくさんあおりなんじゃないの。引き留めちゃいけないわね。

アーサーは一瞬考え深げにヴァイオレットを見てから出て行く。気まずい沈黙がある。

ヴァイオレット わたしが今日昼食を共にしなければならなかったあのいい方たちも、わたしにあると思って喜んでいた力がどれだけのものか知ったら面白がるでしょうね。

クリスティーナ アーサーがあなたの言うことを断わることはまずないわ。あなたを喜ばすためなら実際何だってやるんだから。

ヴァイオレット ほかのことをお願いするまでには長い時間が必要でしょうね。

クリステイナ そんなこと言わないでちょうだい、ヴァイオレット。なぜって、兄に対するあなたの影響力を使ってもらうようにお願いする目的で、今日わたしはここに来たんだから。

ヴァイオレット わたしの影響力がどれだけのものか、お分かりでしょ。

クリステイナ さっきのは主義の問題だったのよ。主義ということになると、男が変なのはいつものことだわ。事情によっては話が違ってくるってことを男に理解させることはできないの。

ヴァイオレット アーサーはわたしのことを子供だと思っているけど。何にしても、

わたしがあの人よりも二十歳も若いのは、わたしのせいじゃないわ。

クリステイナ わたしにはあなたの助けがものすごく必要なのよ、ヴァイオレット。そしてね、アーサーがあなたのために何かするのを断わったばかりだということ、だからこそ今度あなたが頼むことはやってやりたいという気持ちになるってということなのよ。

ヴァイオレット また断られて恥をかくのは嫌だわ。

クリステイナ わたしにとっても大切なことなの。ヘンリーの将来が全く変わるかもしれないのよ。

ヴァイオレット 「態度が変わって、魅力的に」まあ！ヘンリーのためなら、できることは何でもしたいわ。

クリステイナ 副王がアーサーにイギリス人の秘書を頼んだの。わたしにはヘンリーが必要な能力を全部備えていると思えるんだけど、あなたはアーサーがどんな人だかご存じでしょ。自分の友達や親族に目をかけることでちよつとでも疑われるのを恐れているの。

ヴァイオレット じゃあクリステイナ、わたしに何ができるといえるの？自分のことだけ考えていればいいんだって、アーサーに言われるだけだわ。

クリステイナ 兄はそのポストをロナルド・パリーに与えたがって……。

ヴァイオレット 「とっさに」ロニーですって？でも、ロニーはパリに行くことになっっているわ。すっかり決まっているのよ。

クリステイナ そうね。でも、アーサーは彼がエジプトに留まることがぜひとも必要だと思ってるのよ。

ヴァイオレット あなたも知ってたの、アン？

アン たった今まで知らなかったわ。

ヴァイオレット ロニーは知ってるのかしら？

アン 知らないと思うわ。

ヴァイオレットはびっくり仰天する。精一杯、動揺を隠そうとする。

クリステイナは好奇心で冷ややかに、アンは当惑して、ヴァイオレットを見る。

ヴァイオレット わたし……わたし、すごくびっくりしたわ。ほんの一、二時間前に

ロニーとわたしは悲しくお別れの挨拶を交わしたばかりなのに。

クリステイナー 本当なの？ だって、明後日までは出発しないという話だったわ。随分あわててお別れの挨拶をしたものね。

ヴァイオレット 彼は荷造りで忙しいだろうし、わたしにはもうチャンスがないかもしれないと思ったんです。

クリステイナー あなたたちはとても親密だったから、列車が出発する前に彼が折を見てあなたとアーサーにさようならを言うことはきっとできたでしょうに。

ヴァイオレットにはこのセリフの意味が完全には分からない。クリステイナーを見る。すかさずアンが助け舟をだす。

アン ロニーはある程度ヴァイオレットの秘書としても行動していたのよ。ちょっとした機密事項で非公式に話し合いたいことがお互いにいろいろあったんだと思うわ。

クリステイナー もちろんよ。極めて当然だわ。「非常に好意的に」もしわたしがあなたにとつてなくてはならない人を奪おうと思っていたら、ヘンリーのために口添えをしてくれなんてあなたに頼まないわ。でも、もちろん、ロナルドが副王の秘書になれば、あなたのために手紙を書いたり、勘定を払ったりするのを必ずしも続けられるとは限らないでしょ？

ヴァイオレット わたしはとても驚いてるんです。ロニーが行ってしまったというのが頭にこびりついていたものですから。

クリステイナー あなたがヘンリーを助けてくれることで、ロナルドに害を及ぼすことにはならないって、約束できるわ。アンは彼がエジプトを離れることを切望しているのよ。そうじゃなかった？

アン ある意味ではね。ヘンリーは残りの役人人生をエジプトで過ごすつもりでしょ。今回のような職は、渡り鳥ということになっていくロニーにとつてよりも、ヘンリーにとつての方がより重要なのは当然のことだわ。

クリステイナー その通りよ。ロニーはここで経験を積んだわ。これ以上ここにいたいとしても、時間の無駄なだけでしょね。アンが彼を身近に置きたいのは当然のことだわ。多分、この人は彼がここでいたずらをするのをちよつとばかり恐れているのよ。

アン それはどうかしら、クリステイナー。

クリステイナー ねえあなた、彼がどんなに恋に陥りやすいか知ってるでしょ。あまり好ましくない人だつて恋に陥る可能性は常にあるんだから。

ヴァイオレット ひどく頭痛がするわ。

クリステイナー アスピリンを飲んだらどう？ あなたがその気になれば、ヘンリーに例の仕事を与えるようアーサーを説得できるのは間違いないわ。そうなら、万事解決だわ。

ヴァイオレット だけど、アーサーを説得できなかったら？

クリステイナー その場合は、ロニーに頼んでもらわなきゃ。

ヴァイオレット わたしがですか？

クリステイーナ いいこと、もし彼が例の職を断わってエジプトを發てば、その時は、

アーサーもヘンリーを受け入れるのは間違いないわ。

ヴァイオレット どうしてわたしがロニーに頼まなければならないんですか？

クリステイーナ 「楽しそうに」あなたたちはとても親しかったんじゃないの？ あ

なたが彼にそれとなく言えば……彼がヘンリーの邪魔をしてるって……。

ヴァイオレット それはアンがやるべきだと思うけど。

クリステイーナ あなたは何て単純なの！ 男つてのは、自分の妹のためにはやりたくないことでも、かわいい女のためなら結構やるものなのよ。

ヴァイオレット わたしが彼をパリに行かせるようにするのがお望みななの？

クリステイーナ それが一番いいことだって、あなたも思わないこと……関係者全員にとつてね？

ヴァイオレットとクリステイーナはお互いをじっと見る。ヴァイオレットは目を伏せる。ヴァイオレットはクリステイーナが自分の恋に気づいているのを察知する。ヴァイオレットは恐れる。ロナルドが入って来る。絶好調である。

ロニー お茶を一杯飲みに来させられました。アーサー卿もすぐお越しになります。

お知らせがあります。わたしはエジプトに留まることになりました。素晴らしくないですか？

ヴァイオレットははっと息を飲む。

ヴァイオレット じゃあ、決まったのね？

ロニー ご存じだったんですか？ 驚かれると思ってたんですが。

ヴァイオレット いいえ、今聞いたばかりよ。

ロニー 素晴らしくないですか？

クリステイーナ 大変な変わりようね。ほんの二、三か月前には、この国には飽きたってヘンリーに言い続けていたのに。

ロニー そんなことはありません。この国は大好きです。一生ここにいたいです。

クリステイーナ まあ、あきれたこと！

ロニー 「ヴァイオレットに話しかけながら」すごく幸せでいられる場所を離れるのは気違い沙汰じゃありませんか？ ここにいと僕はつくづくと生きている感じがします。素晴らしい国です。人が一日の一瞬一瞬を生きているんです。

クリステイーナ 随分熱狂的だこと。人はもう少しであなたが恋に落ちたと思うでしょうね。

ヴァイオレット ロニーは生まれつき熱狂的なんですわ。

ロニー 「クリステイーナに向かって」 どうしてわたしが恋に落ちちゃいけないんですか？

クリステイーナ 誰となのか言ったらどうなの？

ロニー 「くすくす笑って」 ただの冗談ですよ。希望がたくさんある国で素晴らしい仕事に就くだけで十分じゃありませんか？ アーサー卿はわたしに素晴らしい機会を与えてくださいました。それを最大限に活用しないとしたら、それは僕の怠慢というものでしょう。

クリステイーナ 「冷ややかに」 お茶を一杯いかが？

ロニー 「クリステイーナをからかいながら」 わたしは落ち着く必要があるとお思いですか？ 絞首刑にされようとしているのに赦免された囚人みたいな気持ちなんですよ。落ち着きたくありません。自由になったことを楽しみたいんです。

クリステイーナ つまり、分かったわ、お茶は欲しくないことね。

ロニー 出鼻をくじこうとしても無駄ですよ。今日はわたしは出鼻をくじかれませんから。おめでとうを言ってもらってませんね、アン。

アン あなたがのべつ幕なしにしゃべっていたからよ。口を差し挟む間もなかったわ。

ロニー 「ヴァイオレットに向かって」 例の晩餐のリストにわたしの名前を復活させていただけますか？ 断腸の思いで見送るつもりだったけど。

ヴァイオレット あなたの公式の立場によって事情がかなり変わるんじゃないの？ もう偶数にするためだけにわざわざあなたを呼ぶ訳にはいかないわ。

ロニー ああ、それなら、わたしが招待状を出しましょう。わたしが自分宛てに正式な手紙を書いて事情を説明します。多分、わたしは受ける気になるでしょう。

クリステイーナ ねえロナルド、ひよっとするとあなたは十八なのかもね。

アーサーがヘンリー・プリチャードと一緒に入って来る。クリステイーナの息子で、感じがよくて清潔な青年だが、少しも目立つところがない。

アーサー ヘンリーがお前を迎えに来たと言ってるぞ、クリステイーナ。クリステイーナ それで一瞬も無駄にしないでここに連れて来たのね。

アーサー クリステイーナ、それは全くの誤解だ。お前がかわいい息子と必要以上に長い時間離れていなきゃならないかと思うと耐えられなかったんだよ。

ヘンリー 「ヴァイオレットと握手しながら」 伯母上はいかがお過ごしですか？
ヴァイオレット いたって元気よ、ありがとう。

ヘンリー もうすぐわたしの誕生日がくるのはご存じですよ？

ヴァイオレット それで？

ヘンリー 甥の誕生日には伯母さんから十シリングもらえるものとずっと思っていました。

ヴァイオレット そうなの？ 嬉しいわ。進んで差し出されたあなたの手に、無理にでも喜んで十シリング受け取らせたいわ。

ヘンリー やあ、ロニー。運のいい奴め。おめでどう。

ロニー やあ、君、どうもありがとう。

アーサー 何のことだ？ クリステイーナ！

クリステイーナ ヘンリーに話したの。構わないと思ったし、この子も知っておいた方がいいと思ったのよ。

ヘンリー ねえ、アーサー伯父さん、母が嫌な思いをさせていたかもしれないけど。

わたしのでありませんかね。

アーサー 何がお前のせいじゃないんだ？

ヘンリー それは、昼食を食べながら母から副王がイギリス人の秘書を探していると聞かされた時に、母のきらきらした目付きから、僕がその仕事をもらわな
いと、母が誰かさんに対して不愉快なことをしそうだと思っただけです。

クリステイーナ ヘンリー、お前の言っていることがさっぱり分からないわ。

ヘンリー それは、お母さん、お母さんは年寄りで……。

クリステイーナ そんなに年寄りでもないわ。

アーサー そうだ、ヘンリー。バカも休み休み言え。

ヘンリー でも、僕に給料のいい仕事を見つけることができれば、伯父さんは惜し気もなく大英帝国が完全に崩壊するように仕向けるでしょう。それはご自分
だっでよくよくご存じですよ。

アーサー 幼い子供の口からしばしば賢明な言葉が出るものだが……。

クリステイーナ お前にそんなことを言う権利はないわ、ヘンリー。実際に持つ権利
がお前には限り、わたしはお前のために何かを頼んだことはないわ。

ヘンリー じゃあ、お母さん、お母さんとわたしの間だから率直に言いますが、特に
この仕事はわたしよりもロニーの方がずっとふさわしいですよ。迷ったと
したらどうしようもないバカです。一族の名誉のためにも、アーサー伯父
さんがそんな人だとは思えませんね。

アーサー 男の子をきちんと育てるとどうなるかということだな、クリステイーナ。

クリステイーナ お前は自分でも気づかないうちにこの子を礼儀正しい人間にしてくれた。
クリステイーナ 厄介な子ね、ヘンリー、でも、好きよ。キスしてもいいわよ。

ヘンリー 行きましよう、お母さん。みんなのいる前でキスするつもりはありません
から。

クリステイーナ 「立ち上がりながら」じゃあ、さようなら、ヴァイオレット。さつ
き話し合ったこと、忘れないで、いいわね？

ヴァイオレット さようなら。さようなら、ヘンリー。

クリステイーナ 「アンに向かって」わたしたちと一緒にちよっとドライブしません
か？ こんなに素敵な夕暮れなんですよ。

アン わたしを連れて行ってくださるの？ 行きたいわ。すぐ帽子を被ってくる
わ。

アンは立ち上がる。三人は公邸に向かって歩き始める。

クリステイーナ 「頬を寄せて」さようなら、アーサー。

アーサー ああ、ちょっと一緒に行ってお前を車に乗せてやるよ。僕がお前の重要な立場に見合った作法で扱わなかったなんて言わせないようにな。

二人はぶらぶらと去って行く。ヴァイオレットとロニーは二人だけで取り残される。

ヴァイオレット お戻りになるわね、アーサー？

アーサー ああ、うん、すぐにね。

出て行く。

ロニー 「小声で」ヴァイオレット。

ヴァイオレット 静かに。

ロニー 素晴らしいじゃないか？ 僕はもう少しで君をどんなに愛してるかみんなに分からせるところだった。

ヴァイオレット もう少しでじゃないわ。クリステイーナは前から疑ってたのに、あなたはさつきあからさまに言ってしまったのよ。

ロニー 「陽気に」それは君の空想だよ。自分にとってはっきりしていることだから、ほかの人にとってもはっきりしているに違いないと思うんだ。

ヴァイオレット わたしは今まで隠し事なんかしたことはなかったわ。あなたはわたしに隠し事が好きだと思う？

ロニー 彼女が知っているとしても、それがどうだって言うの？ 彼女に害がある訳じゃないし……。君のことを愛さずにいられる人なんかいると思う？

ヴァイオレット 「とつきに」言うことに気をつけて。

ロニー 誰にも聞かえないよ。誰かに見られたって、政治情勢を話し合っていると
思うだろうね。

ヴァイオレット あなたって抜け目がないのね、ロニー。

ロニー 愛してる。愛してるよ。愛してるんだ。

ヴァイオレット お願いだから、そんなことばかり言わないで。わたしはとても恥じているの。

ロニー 「驚いて」何のこと？

ヴァイオレット 今さつき、今日の午後、あなたがパリへ行ってしまおうと思っていなかったら、あんなことは決して言わなかったのに。あの時、わたしはどうかしていたのよ、ロニー。決して言うべきじゃ……。

ロニー 言ってくれてよかったんだよ。君が僕に与えてくれた幸せを今更出し惜しみすることはできっこない。今僕からその幸せを奪い取ることはできない

んだ。君が僕を愛してるのは分かってる。僕は太陽と月を手に入れたんだ。それに、空の星も全部ね。

ヴァイオレット 「絶望的になって」わたしたちはどうすればいいの？ ああ、不公平だわ。

ロニー もう言ってしまったことだ。取り消すことはできない。君を見る度に、僕は思い出すだろう。僕は君を抱いて、唇にキスしたんだ。僕からそのことを取り去ることはできない。それに、僕がパリに行く必要はないんだ。しよっちゆう君に会えるだろう。ああ、僕はすごく幸せだ。

ヴァイオレットは自分を抑えようとしながら、しばらくの間行ったり来たりしてから、気持ちを固める。ヴァイオレットは立ち止まってロニーと面と向かう。

ヴァイオレット わたしはあなたにパリに行ってほしいの、ロニー。何か口実を作って、ここでの指名を断わってもらいたいわ。

ロニー いいや、もう君を残して行くことはできない。

ヴァイオレット お願いだから、パリへ行ってちょうだい。

ロニー 僕にそうしてほしいの？

ヴァイオレット ええ。

ロニー それなら、手を出しておくれ。

ヴァイオレット どうして？

ロニー 手を出すんだ。「ヴァイオレットが手を差し出すと、ロニーはそれを握る。」僕を愛してるって言うてくれ、ヴァイオレット。

ヴァイオレット ダメよ。

ロニー 何て冷たいんだ、君の手は！

ヴァイオレット 放してちょうだい。

ロニー 君は本当に僕にパリに行ってほしいの？

ヴァイオレット 本当じゃないのは分かってるくせに。わたしはあなたが大好きなの。あなたが行ってしまったら、わたしは死んでしまうわ。「ロニーは身をかがめて情熱的にヴァイオレットの手にキスする。」ロニー、ロニーったら、やめてちょうだい！ 何をしているの？「ヴァイオレットは無理やり手を引き離す。ヴァイオレットは感動のあまり震えている。ロニーは激情で蒼白になっている。二人はしばらくの間黙ったまま向かい合ったままでいる。」何という罰なの！ 今日の午後、あなたがわたしを愛してるって言った時、今までの人生は決して幸せなんかじゃなかったんだと思ったわ。

そして、あなたがパリに行ってしまったわなきやならないと思うと、わたしの心はずたずたになったけど、わたしの気持ちは——ああ、分からないわ——まるで喜びに圧倒されたみたいで、わたしの心にはほかのものが入る余地はなかったのよ。それなのに、今わたしはみじめな、みじめな気持ちだわ。

ロニー　でも、どうして？　ダーリン！　ねえ君、僕たちは離れ離れになるはずだったけど、これからは一緒にいられるんだよ。この上、何が問題だったの？

ヴァイオレット　何もかも絶望的だわ。

ロニー　絶望する必要なんかないよ。

ヴァイオレット　ほかにどうかかなりようがあるの？

ロニー　僕が君を愛するのは一日とか一週間じゃない、ヴァイオレット。永久に愛するんだ。

ヴァイオレット　たとえ何があっても、わたしはアーサーに対する義務は果たすつもりよ。

ロニー　君の邪魔をするつもりはないよ。僕が君に何を求めていると思う？　君に会いたいだけなんだ。自分が君と親密だということを感じていたいんだ。君の手に触れたいんだ。君のことを考えたいんだ。それが君にどういう害を及ぼすっていうの？

ヴァイオレット　わたしが自由の身だったら、笑ってあなたの好きなようにさせてあげられるでしょうね。でも、そうじゃない。わたしは手も足もあなたに縛りつけられているもの。わたしにとっては拷問だわ。そして、最悪なのは、わたしがその束縛が大好きだということなのよ。その束縛がなくなるのを望むことなんてできない。わたしはあなたのなすがまま。愛してるわ。

ロニー　ああ、でも、僕にはそれだけで十分だよ。誓って僕は、君が後悔するようなことはしてほしくないんだ。

ヴァイオレット　後悔するようなことがわたしたちの手からなくなってくれさえすれば。何が起こるっていうの？

ロニー　何が起こるっていうの？

ヴァイオレット　ひよっとすると、副王が気持ちを変えるかもしれないし、あるいは、外務省があなたにパリへ行けと言うかもしれないわ。

ロニー　そうになったら嬉しいの？　ヴァイオレット、僕は君にほんの少しのものが望んでいないんだ。僕にそのほんの少しのものをくれたからって、君がどれだけ傷つくっていうの？　幸せになるチャンスをつかもうよ。

ヴァイオレット　わたしたちは決して幸せになれないわ。決してね。わたしたちにできるのは別れることだけなのに、あなたを行かせることができない。できないわ。できっこないわ。そんなの無理な注文だわ。

ロニー　僕は心の底から君を愛してるんだ。こんなにも人を愛することができるなんて知らなかった。

アーサーが独りで陽気に口笛を吹いているのが聞こえる。

ヴァイオレット　アーサーだわ！

ロニー　「とっさに」行った方がいいかな？

ヴァイオレット ええ。いいえ。わたしたち、隠れる必要があるの？ もうそういうことになってしまったの？ ああ、自分が嫌になる。

アーサーが入って来る。

ヴァイオレット 「明るく」今日の午後は随分楽しそうね、アーサー。あなたが口笛を吹くのはめったに聞かないわ。

アーサー 僕の年齢や地位にふさわしくないとと思うかい？

ヴァイオレット お茶を一杯入れましょうか？

アーサー 本当のことを言うと、そのためにここに来たんだ。

ヴァイオレット わたしと一緒にいるのが嬉しいからだと自惚れていたのに。

アーサー ロニー、明日十一時に副王が僕に会いに来て大丈夫か見てきてくれないか？

ロニー かしこまりました、閣下。

ロニーは出て行く。

ヴァイオレット どんな用件で副王に会うの——秘密じゃないんでしょ？

アーサー 全然。ロニーの名前を提案するだけだよ。

ヴァイオレット じゃあ、さっきの件はまだちゃんと決まった訳じゃないの？

アーサー 正式には決まっていない。外務省に出した電報の返事をまだもらっていないし、僕の提案に対する副王の承諾ももらっていない。

ヴァイオレット でも、もし、やっぱり彼はパリに行った方がいいと外務省が言ったら？

アーサー それはまずあり得ないと思うよ。今は、外務省も現場にいる人間が状況を最もよく判断できるということが分かっているし、僕も外務省が僕に自由裁量権を与えるように習慣づけてきたからね。

ヴァイオレット 副王に異論はないと思うの？

アーサー 副王はロニーとちよつとした知り合いだし、好きなんだ。僕の選択を喜ぶと思うよ。

間がある。アーサーはお茶を飲む。アーサーがヴァイオレットの動揺に気づいている気配はない。ヴァイオレットは意を決しかねて苦しんでいる。

ヴァイオレット アーサー、今さっきアブドウル・セツドのことでわたしの機嫌が悪かったとしたらご免なさい。わたしに関係ないことで干渉するなんてバカだったわ。

アーサー いや、君、そんなこと言わないで。君が望むことをやってあげられなくて申し訳ない。

ヴァイオレット わたしこそ不必要に怒りっぽくなってたわ。許してください？

アーサー ねえ君、自分を責めないで。たまらないよ。許すことなんか何もないんだから。

ヴァイオレット たくさんのことがあなたのお陰なのに。あなたに辛く当たったと思うと嫌になるわ。

アーサー 僕のお陰なんてことは何もないね。それに、君は人に辛く当たるなんてできっこないよ。

アーサーはヴァイオレットの両手を取ってキスしようとするが、ヴァイオレットはすぐに両手を引っ込める。

ヴァイオレット ダメ、手にはキスしないで。

アーサー どうして？

アーサーは驚く。ヴァイオレットはとっさにはっとする。アーサーがヴァイオレットの両手を見ると、ヴァイオレットは、まるでロニーが数分前にしたキスの跡をアーサーに見られたかのように、両手を隠す。

ヴァイオレット 「あまり悪さからかすかに笑って」キスしたいなら、頬の方がいいわ。

アーサー 頬が何のために作られているのか分かったよ。

アーサーは頬にはキスしようとしないう。ヴァイオレットはアーサーをちらっと見て、目をそらす。

ヴァイオレット アーサー、ヘンリーがああの仕事に就けないと、クリスティーナはす

ごくがっかりするんじゃないかしら。

アーサー 彼女が僕と同じように毅然として失望に耐えることを期待しよう。

ヴァイオレット 彼女はあなたの気が変わるだろうという望みを完全には捨てていないと思うの。

アーサー 「くすくす笑って」それは確かだ。この件が正式に決まるまで、気が休まることはあまりないだろうね。だから、早いとこ決めるつもりだよ。

ヴァイオレット 何でヘンリーに反対なの？

アーサー 反対じゃない。あいつがロナルド・パリーほど素晴らしい人間じゃないって言うだけだ。

ヴァイオレット この前も、いい仕事があったけど、ヘンリーはもらい損ねたわ。

アーサー ヘンリーは、よりふさわしい人間がいない時に、とても役に立つ奴なんだ。

ヴァイオレット あなたは彼が甥だからといってえこひいきすることをよしとしないあまり、明らかに偏見を持っているとクリスティーナは思ってるわ。

アーサー クリステイーナは、大抵の女と同じように、評判を悪くするような動機を見抜く確かな目を持っているな。

ヴァイオレット あなたがヘンリーを助けようとしなさいって、彼女はわたしを責めるの。その原因はわたしが彼女を嫉妬しているからだと思ってるわ。

アーサー いかにもあいづらいな！ 僕が知ってる中で最高の母親だが、最も理性的でない女でもある。

ヴァイオレット 「言葉を振り絞って」あなたが考えを変えて、ロナルド・パリーの代わりにヘンリーに例の仕事を与えてくださったら、すごく嬉しいんだけど。

アーサー お願いだから、君、僕にそんなこと頼んだりしないでおくれ。君の望みを断るのが、僕にとってどれだけ嫌か分かってるくせに。

ヴァイオレット アンはロニーがパリに行くことを切望しているわ。彼はすっかり準備ができていますもの、行かせてあげた方がいいとは思わない？

アーサー 悪いけど、思わないね。彼にはここにおいてほしいんだ。

ヴァイオレット あなたが承諾してくれたって、クリステイーナに言いに行けたらすごく嬉しいんだけど。わたしにとっては大きな違いになるんですもの。わたしは彼女に好かれないし、彼女にそういう親切をしてあげることができれば、絶対に忘れられないと思うの。ああ、アーサー、ダメなの？

アーサー ねえ君、悪いけど、できないよ。

ヴァイオレット 約束するわ。わたしのためにこれをやってさえくれれば、生きてる限り二度とお願い事はしないって。わたしにとってはそれほど大きな意味があるの。どれだけ大きいか、あなたには分かかっていないんだわ。

アーサー できないよ、ヴァイオレット。

ヴァイオレット アンとは話し合わないの？

アーサー 実を言うと、彼女の問題ではないと思ってる。

ヴァイオレット 「ためらいながら」ロナルドがパリ行きを命じられたのは彼女の力が働いたせいでしょう？

アーサー どうして？

ヴァイオレット 知りたいの。もし彼女が彼を動かすために糸を引いていたのだとしたら、何か理由があると思うの。彼はここでとても快適だった。あなたにぴったりの秘書が見つかるのはめったにないことだし。

アーサー それは、そう、彼女の仕業だよ。今までほど頻繁にエジプトに来るつもりはないし、弟をもっと近くに置きたいって、彼女が言った。

ヴァイオレット 弟さんと頻繁に会いたいのなら、随分ふさわしくない職業を選ばせたものね……。彼女は本当のことを言っていないんじゃないかしら。

アーサー 「とっさに」そんなことはないはずだ。彼女の説明は極めて当然だと思っただ。彼女の計画を邪魔しなければならないのは残念だよ。

ヴァイオレット 彼女がなぜロニーがエジプトを離れることを切望しているか、わたしがあなたに話しても、彼女はきつと気にしないと思う。彼が既婚の女性

に恋しているから、彼を離れた方がいいと思ったのよ。多分、あなたには言いたくなかったんでしょね。彼女はとても心配だったんだと思うわ。

アーサー 多分、そんなのは一時的にのぼせ上っているだけだよ。早いと克服するように祈ろう。たまたまうまくいくはずのない相手を好きになったからといって、有能な役人を失う訳にはいかない。

ヴァイオレット わたしは説明があまりうまくないみたいね。ロニーはどうしようもないくらい恋してるのよ。そうとしか言いようがないわ。彼を行かせなきゃダメなのよ。とにかく、あなたは彼が大好きでしょ。小さな子供の頃から知っていて、外務省がたまたま送って寄こした青年じゃないんですもの。全く無関心ではいられないはずよ。ひよつとすると、彼の人生がかかっているんですもの。安全な所に行かせる方が——親切だし——賢明だとは思わない？

アーサー ねえ君、知つての通り、僕——アーサー・リトルは——君を喜ばせるためだったら何でもするし、アンの幸せとロナルド・パリーの人生を大いに気にかけているよ。でも、いいかい、僕は役人でもあって、役人は一般人が喜ぶような類のことばかりやる訳にはいかないんだ。

ヴァイオレット どうして役人と一般人を分けることができるの？ 一般人が反対することを役人がやることはできないでしょ。

アーサー そう！ そこが国家が誕生して以来議論されてきた点なんだ。政治家は個人的な道徳の原理に拘束されているのだろうか？ 理論的には我々の大部分の答えは「イエス」だが、実際にはそんな原理に基づいて行動する奴はほとんどいない。今回の場合は、ねえ君、そんな議論もほとんど当てはまらない。一般人が政治家かで葛藤するような点は見つからないよ。

ヴァイオレット 本当にあなたには関係ないと思ってるの、アーサー？

アーサー そうは言っていない。でも、僕は感情に訴えるものがあるからといって自分の判断に差し障るようなことにするつもりはない。状況はよく分かっているつもりだ。気持ちを变えるつもりもない。明日、副王にロニーの名前を提案するつもりだ。

ヴァイオレット わたしのこと、バカだと思ってるの、アーサー？

アーサー ちつとも、君。賢くなければ君のように美しくはなれないよ。

ヴァイオレット それなら、ロニーをパリに行かせるようにって、わたしがこれだけ強く言ったら、何かもつともな理由があるに違いないと思わない？

アーサー 「すかさずヴァイオレットを見て」その話は放っておいた方がいいと思わないか、君？

ヴァイオレット こんなこと言うと、わたしのことをバカで自惚れが強いと思うかもしれないけど、あなたは知るべきだと思うの——ロニーはわたしに恋してるのよ。だから、ロニーにはパリに行ってもらいたい。

アーサー 彼が君に恋するのは極めて当然だよ。ほかの奴がそうならないのにいつも驚いてるんだ。君をサハラ砂漠の奥地に連れて行って住ませる以外、どうやったらそれを防げるか分からないくらいだ。

ヴァイオレット 大したことないみたいに言わないで、アーサー。あなたに話すのはそんなに簡単じゃなかったんだから。

アーサー 僕にどう受け止めてほしいの？ ロナルドを責めることはできないよ。彼は紳士で通っているんだ。僕は彼によくしてきた。彼なら不幸な事態でもうまくやるだろう。

ヴァイオレット あなたには何の違いもないって言うの？

アーサー 今度の秘書の仕事は非常に重要な地位への足掛かりなんだ。彼がエジプトで一番魅力的な女に恋するようなく当然なことをしたからといって、君は僕に彼からその仕事を奪えなんて頼む気じゃないよね？ 僕の秘書はみんな君に恋するだろうね。かわいそうな奴らだ、どうしたらそれをやめさせることができるのか、僕には分からない。

ヴァイオレット 気が狂いそうだわ。これは深刻な、とつても深刻な話なのに、あなたったら平気で冗談ばかり言うんだから。

アーサー 「真面目に」軽薄な言動が多くの場合深刻な状況を扱う最善の方法だと思つたことない？ 時には、あまりに深刻すぎて、深刻に受け止めきれないことだつて実際ある。

ヴァイオレット それ、どういう意味？

アーサー 大したことじゃない。間の悪い冗談の言い訳をしていたんだよ。

ヴァイオレット ロニーをここに残すつて決めたの？

アーサー そうだよ。「間がある。アーサーは立ち上がつてヴァイオレットの肩に手を置く。」これ以上言うべきことはないと思う。よければ、事務所に戻りたいんだが。

ヴァイオレット ダメ、まだ行かないで、アーサー。まだ言いたいことがあるのよ。

アーサー それ以上言わないよう、君に忠告してもいいかな？ 言い過ぎるのは実に簡単だが、言うことが少な過ぎても決して賢明でないということではないんだよ。どうか、僕たち両方が後悔するようなことは言わないでくれたまえ。

ヴァイオレット わたしを絶対的に信頼しているから、ロニーがわたしを愛しても大した問題じゃないと思つてるのね。

アーサー 絶対的にね。

ヴァイオレット わたしが自分の意志に反して彼の愛に影響されるかもしれないと思つたことはないの？ それほど全く安心だと思つてるの？

アーサー そういう疑いが頭をよぎるようであれば、僕が君の愛情に全く値しない人間だということは確実だろうね。

ヴァイオレット アーサー、わたしはあなたに隠し事をしたくないの。

アーサー 「ヴァイオレットを止めようとして」いけないよ、ヴァイオレット。それ以上言わないでくれ。

ヴァイオレット 今言う必要があるのよ。

アーサー ねえ君、一度口に出したら元には戻せないつてことが分からないの？ 僕たちが両方とも知つてることかもしれない……。

ヴァイオレット 「遮って」何を言ってるの？

アーサー でも、お互いに話さない限り、無視することができる。ある言葉が口から出たら、その時は状況が完全に変わるんだよ。

ヴァイオレット わたしを脅してるのね。

アーサー そんなつもりはないよ。僕が知らないことを僕に話さないでおくことができるのは君の方だけなんだ。でも、君が僕に話したら、君は取り返しのない損害を与えることになるかもしれないよ。

ヴァイオレット あなたはご存じだっておっしゃるの？ まあ、あり得ないわ。アーサー、アーサー、仕方がないのよ。あなたに話さない訳にはいかないわ。わたしの心は燃えているんですもの。わたしは全身全霊でロニーを愛してるのよ。

間があつて、その間二人は見つめ合う。

アーサー 僕が知らないと思つたの？

ヴァイオレット それなら、どうしてあの人に例の仕事をつて言い出したの？

アーサー そうしなければならなかったからだよ。

ヴァイオレット あなたがヘンリーの名前を持ち出したとしても、誰も非難することはできなかったでしょうに。

アーサー ねえ君、僕はかなり額の給料をもらっているんだ。全力で仕事をしなければ、人をだまして金を取っていることになるのは確実だろうね。

ヴァイオレット わたしたち三人にとって幸、不幸の分かれ道になるかもしれないよ。

アーサー 僕はその危険を冒さなければならぬんだ。いいかい、ロニーはこの仕事に最適なんだ。その仕事を彼に与えるのは世間並みに正直だというだけのことなんだよ。

ヴァイオレット あなたはもうわたしを愛してないの？

アーサー そんなこと訊かないでくれ、ヴァイオレット。僕が心から愛してるのは分かつてくせに。

ヴァイオレット それじゃ、理解できないわ。

アーサー 彼が留まることを僕が望むなんて君は思わないだろ？ 外務省から彼をパリに転勤させるといふ電報が来た時、この中年の胸は嬉しさのあまりただ躍つたよ。彼が持っている僕に勝るすべての利点が僕に分らないとでも思うのかい？ 彼には君に差し出せるものがとてもたくさんありそうだったが、僕にはほんの少ししかなさそうだった。

ヴァイオレット そんなこと、アーサー！

アーサー でも、もし彼が行ってしまったら、君もやがて忘れるだろうと思つた。僕が君に優しく寛容にしていれば、そして、君が与えてくれる気になつていよう以上のもを何も望まなければ、やがて君も僕に対して、多分愛ではないだろうが、優しい気持ちと親愛の情を覚えるようになるかもしれないと思

ったんだ。僕に望めるのはそれだけだったが、それだけでも僕はとても幸せになっただろう。そういう時に、副王からイギリス人秘書を要請されて、それにふさわしい人間はロニーしかいないと思った。いいかい、僕は随分長いことこの仕事に就いてきたから、僕の役人魂がほとんど機械的に決断を下すんだ。

ヴァイオレット そう決断することで、男としてあなたの胸が張り裂けるとしたら？
アーサー 「ほほえみながら」慈悲深い神の介在によって、我々は皆、負わされた重荷に耐えるだけの力を持ち合わせているようだ。

ヴァイオレット そう思う？

アーサー 君だって、我々みんなと同じなんだよ、ヴァイオレット。

ヴァイオレット わたしがあの人を愛していること、いつから知ってたの？

アーサー ずっとだよ。多分、君自身が気づく前からだと思うね。

ヴァイオレット どうして何かしなかったの？

アーサー 何ができたか教えてくれないか？

ヴァイオレット わたしたちのこと、怒ってないの？

アーサー 怒ったりしたら、バカだろう。僕にはとても自然なこと、極めて当然なことと思えるよ。彼は若くてハンサムだし元気だ。君が彼と恋に落ちたのは避けられないことだったと今は思うね。君たちはお互いのために生まれてきたのかもしれない。

ヴァイオレット まあ、あなたに分かるの？

アーサー 君だってそう思っただろ？ ちょっと考えれば誰にだって分かることだと思うね。「ヴァイオレットは答えない。」最初に彼と出会っていればよかつたと、心から思わなかったかな？ 僕が君と結婚したから、今は僕を恨んでいるんじゃないの？「ヴァイオレットは目をそらす。」かわいい子、君にはとてもすまないと思ってる。この一、二か月の間、君が僕に示してくれた親切に、ずっと感謝していたんだ。君が僕を愛そう、優しくしようとな努力してくれていたことは分かっていた。僕には君の気持ちがあつていなし、僕のこと、君が不幸になってはいけなから、君に無理をしないように言いたかった。でも、どうすればいいか分からなくてね。できるだけ面倒をかけないようにすることしかできなかったんだよ。

ヴァイオレット あなたはともよくしてくれてたわ、アーサー。

アーサー 君にはそれくらいのは期待する権利があるよ。君と結婚したことで、僕は君にひどいことをしたんだ。君が僕を愛してないのは分かっていた。君は経済的な境遇に目がくらんだんだ。結婚がどんなものか、それに伴う制約が愛によって自由よりも心地よいものにならないければ、結婚がどんなにうんざりするものになるか、君は分かっていたいなかった。でも、僕は君を熱愛していたからね。愛が芽生えるだろうと思ったんだ。心からのお願いだ、僕を許してくれたまえ。

ヴァイオレット ああ、アーサー、そんなふうには言わないで。わたしはあなたと結婚してとても幸せだったわ。あなたのことを素晴らしいと思って、とても興

奮して嬉しかった——それが愛だと思つてたのよ。こんなふうに愛が芽生えるなんて知らなかった。どういうことを予想すべきか分かつてさえないれば、戦うことができたのに。不意討ちを食つたの。わたしには勝ち目があった。わたしのせいじゃないわ、アーサー。

アーサー 君を責めてるんじゃないよ、ヴァイオレット。

ヴァイオレット 責めてくれた方が気が楽だわ。

アーサー 運が悪かつただけだよ。運が悪い？ 予想できたかもしれないが。

ヴァイオレット それにしても、あなたに話せてよかつたわ。あなたに隠し事をするのは嫌だつたの。お互いに隠しだてをしない方がいいもの。

アーサー とにかく君を助けることができれば、君が僕に話してくれたことは僕も嬉しいよ。

ヴァイオレット 何をすればいいのかしら？

アーサー 何もすることはない。

ヴァイオレット アーサー、今日までロニーとわたしは誰かに聞かれちゃいけないことは一言も交わしてないのよ。わたしは彼と一緒にいられて幸せだつたし、彼がわたしのことを好きなのを知つて、それだけでわたしはとても満足だつた。でも、突然彼が行つてしまふと聞いた時、すべてが変わつたの。彼を行かせるのは耐えられないと思つた。ああ、わたしはとても恥ずかしいわ、アーサー。

アーサー かわいそうに！

ヴァイオレット どんなふうに始まつたのか分からないの。わたしを愛してゐるって、あの人は言つた。あの人はそんなつもりじゃなかつたのよ。あの人があなたに忠実でなかつたなんて思わないでね、アーサー。わたしたちは二人とも気が動転してた。それは彼と同じようにわたしのせいでもあつたの。あの人がわたしにとつてどれほど重要な存在か、あの人に知らせない訳にはいかなかつた。わたしたちはお互いに二度と会えないだろうと思つたわ。あの人はわたしを両腕で引き寄せて抱いたの。わたしはとても幸せだつたけど、とてもみじめだつた。人生がこんなにも意味のあるものだなんて、考えたこともなかつたわ。

アーサー 今さつき、君たち二人だけの時に、彼は君の両手にキスしたんだね。

ヴァイオレット どうして分かるの？

アーサー 僕は君の両手にキスしたかつたのに、君は引つ込めた。君は僕が触れるのに耐えられなかつたんだ。まだ、両手に彼の唇が押し当てられたのを感じていたんだね。

ヴァイオレット どうしようもなかつたの。あの人はパリへ行く必要がなくなつたら我を忘れて喜んでいたわ。わたしはあの人を愛したくはないのよ、アーサー。あなたを愛したいの。一生懸命努力したわ。

アーサー ねえ君、人は愛するか、愛さないかのどちらかなんだよ。努力しても大して役には立たないんじゃないだろうか。

ヴァイオレット あの人がここに留まれば、しよつちゆうあの人と会わなきやならなくなる。わたしがそれに打ち勝てる見込みはないわ。ああ、できないわ。できっこないわ。そんなの耐えられない。わたしを哀れんてちょうだい。

アーサー 君はとても不幸になるんじゃないだろうか。でも、いいかい、君の幸せより危ういものがあるんだ。ちよつと前に、君は今やっていることよりもっと多くのことを国のためにやりたいと言ったね。今君が国のためにできることがあるという気はしないかい？

ヴァイオレット わたしが？

アーサー 僕たちは皆、偉大で英雄的なことをやりたいと思うが、普通は実にささいなことしかできない。君はそういう英雄的なことは避けるべきだと思うかな？

ヴァイオレット わたしには分からないわ。

アーサー ロニーはここで計り知れないくらい価値のある人間になることができる。君は彼に対する気持ちを抑えることはできない。僕は君を責める気にはなれない。でも、君は自分の言動を使い分けることはできる。僕たちはどうすべきだろうか？ 君は、僕が仕事の半分しか終えていない時に辞めるのは望まないだろう。僕たちは自分の立場をできるだけ利用しなければいけない。ここにいる僕たちは皆、特に君は僕の妻だから、大方の女たち以上に、自らの生き方と手本を示すことによつて共通の目的のために働いているということをお忘れなく。何としても、僕たちは誠実で、正直で、非の打ちどころがないと思われなければならない。あるものに見えるだけということよりも、そのものであることの方がずっと問題が少ないことを、人間は経験で知っている。僕たちが非難されるのを避ける方法はたった一つしかないが、それは非難の余地がないようにしていることだ。

ヴァイオレット ロニーとあなたがここにいるのはお国のためだつていうの？ それで、わたしの胸が張り裂けても、問題じゃないのね。あの人を遠くへ遣るようあなたにお願いした時、わたしは結構役に立ってるんだと思つてた。わたしが心底あの人に留まつてもらいたかつたのが分からないの？ わたしがどう思つてるか分かる、アーサー？ ほかのことは考えられないの。わたしはあの人を恋い焦がれる気持ちに取りつかれているよ。今日までなら、それに耐えることができた。でも、今は……。始終、わたしを抱くあの人のお腕と、唇にされたキスの感触があるの。あなたにはわたしの心を焼き尽くす喜びと苦しみと恍惚感が分かりっこないわ。

アーサー いいや、君、愛が何たるか、僕が知らないと思うの？

ヴァイオレット わたしは正しいことをしたいのよ、アーサー、でも、わたしに多くを望みすぎてはいけないわ。わたしがあの人を表面的な友達として扱わなければならぬのなら、会い続けることはできないわ。無理よ、アーサー、無理だつてば！ あの人を留まらなければならぬのなら、その時はわたしを出て行かせてちょうだい。

アーサー 絶対ダメだ。僕の考えでは、たとえその必要がないとしても、今は彼を留まらせるだろう。君と僕は危険から逃げるような人間じゃない。とにかく、僕たちは自分の熱情に身を委ねる訳にはいかない——僕たちがその気になれば、熱情は抑えることができる。君自身のためにも、君は留まらなくてはいけないんだ、ヴァイオレット。

ヴァイオレット もしわたしがくじけたら、その時は。

アーサー 不幸にくじけるのは価値のない人間だけだ。君に信念と勇気と誠実さがあれば、不幸が君をより強くするだけのことだ。

ヴァイオレット あなた自身のこと考えたの、アーサー？ あの人がわたしと一緒にいるのを見たら、あなたはと思うかしら？ あなたが事務所で仕事をしていた、わたしがどこにいるのか分からない時に、あなたは何を考えるかしら？

アーサー 君が不幸なことが分かっているし、とても優しい気持ちで君に同情するだろうね。

ヴァイオレット あなたはわたしが心から身を委ねたい誘惑にわたしをさらしているのよ。何がわたしをためらわせるっていうの？ あなたに対する義務を果たさなければならぬという考えだけだわ。何がわたしに報いるっていうの？ 多分、お国のために少しは役に立っているだろうという思いだけだわ。

アーサー 僕自身のこととは君に任せるよ、ヴァイオレット。僕が君を責める理由になるようなことではなくて——僕は決して君を責めたりはしないが——君が自分を責める理由になるかもしれないようなことを君ができるとは思わない。

間。

ヴァイオレット 今さっき、わたしたちがアブドゥル・セッドのことを話していた時、あなたに影響を及ぼす事柄であっても義務を果たすことができるかって訊いたけど、わたしが言ったのは、あなたにとって不幸と幸福のどちらかであつてもということなのよ。

アーサー ねえ君、義務というとかなりいかめしい言い方だ。僕が——給料分だけはやりたいってことにおこうよ。

ヴァイオレット あなたはわたしのことを随分バカだと思つてたに違いないわ。わたしはあなたが決して試験を受けないことを望んでると言ったけど、すでに試験を経験して、それでもあなたは躊躇しなかったのね。

アーサー 大体、こういうことは習慣の問題なんだ。

ヴァイオレット あなたにできることなら、わたしにだってできるわ、アーサー——あなたがわたしを信じてくれれば。

アーサー もちろん、信じてるよ。

ヴァイオレット それなら、あの人を留まらせてちょうだい。わたしはできることをやるわ。

ロニーが入って来る。

ロニー わたしが電話をかけましたら、副王は手がふさがっていらっしやいました。でも、メッセージを残しておきましたので、ちょうど返事が来たところです。喜んでお会いになるそうです、閣下、十一時に。

アーサー 大変結構。ロニーは明日わたしたちと一緒に昼食を取らなければいけない。昇進を祝って一本あげよう。

第二幕終わり

第三幕

舞台には領事代理公邸の庭とベランダの一部が見えている。色のついたランタンがあちこちに取り付けられている。夜になっており、遠くに青い空一面に星がきらきら輝いているのが見える。ベランダの後ろには明るくともっている公邸の窓がある。公邸の中でバンドがダンスの曲を演奏しているのが聞こえる。ヴァイオレットがダンスパーティーを開いているのだ。登場人物は皆、素晴らしいガウンを着ている。ヴァイオレットは自分が持っているパールとダイヤモンドを全部身につけている。アーサーは階級を示す幅の広いリボンをシャツの胸の部分に交差させている。パーティーも終わる頃である。何人かがベランダの椅子に座って涼しさを楽しんでいる。アップルビー夫妻、クリステイーナとアーサーである。

アップルビー さてと、お前、そろそろお前をホテルに連れて帰る時間だと思うんだが。

アーサー そんな、バカな！ ダンスパーティーが本当に楽しくなるのは、みんなが帰ってしまったからなんですよ。

クリステイーナ お客様が聞いたらさぞ喜ぶでしょうね。

アップルビー夫人 こんなふう到最后の最後までいってしまったって本当に恥ずかしい限りですけど、わたしは若い人たちが楽しんでいるのを見るのが大好きなんですの。

アーサー さすが！ あなたは年を重ねることを最大限に活用する方法を悟っておられる。高齢の慰めは我々に続く者たちの若さの中に喜びを見出すことですからね。

クリステイーナ ちょっと失礼だと思わ、アーサー。

アップルビー夫人 どういたしまして、わたしが昔ほど若くないのは分かっていますから。

アーサー 気にしてませんか？

アップルビー夫人 わたしが？ どうして？ いい時もありましたし、楽しみましたから。今はほかの人にチャンスを与えるのがフェアというものですわ。

クリステイーナ きつと、ナイル川上流の旅は楽しかったんでしょうね。

アップルビー夫人 ええ、素晴らしい時を過ごしました。

アーサー それで、どういう結論に達したんですか、アップルビーさん？ あなたが楽しみばかりでなく教訓を求めているのを覚えてますが。

アップルビー あなたに言われたことは忘れちゃいませんよ。もっぱら耳を開いて口を閉じていました。

アーサー 素晴らしい行動ですが、民主主義社会ではあまり歓迎されませんね。

アップルビー　だが、それにもかかわらず、わたしは一つの実に明確な結論に達しました。

アーサー　それはどういうことですか？

アップルビー　実は、二つあるんです。

アーサー　それはあまり満足できる話ではありません——その二つが互いに矛盾しない限りね。矛盾していれば、あなたがとにかくエジプト問題の要点を把握できたと言ってもいいでしょう。

アップルビー　第一は、あなたが適材適所だということです。

アーサー　クリスティーナは認めないでしょうね。長年、わたしよりも自分の方がずっとうまくエジプトを統率できると思っていますから。

クリスティーナ　それは少しも否定しないわ。総じて女の方が男よりも分別があると思ってますから。女は感情に動かされません。女の方が現実的です。女は原則的なやり方よりも臨機応変の手段の方がしばしば勝ることを知っているし、原則的なやり方を放棄することなく臨機応変の手段を取ることができますもの。

アーサー　お前のせいで頭がくらくらするよ、クリスティーナ。

アップルビー　実にたくさんの種類の違う人間と会う機会がありました。閣下に対するもつともな不平は聞きませんでした。個人的には閣下のことを好きでない人間もいましたが、尊敬はしていましたし、信頼していました。閣下はどんなふうにして操っているのかと、わたしは自問しましたよ。

アップルビー夫人　それは閣下に人間味があるからだって、わたしは言っていました。

アーサー　わたしがお世辞を聞くのは非常によくないことだとクリスティーナは思っています。

クリスティーナ　そうやってからかえる優しい妹が一人もいなかったら、クリスティーナの兄はどうするんでしょう。クリスティーナの知ったことではないけど。

アップルビー　この国が年々繁栄して満ち足りていくのを見るのは、閣下にとって大いに満足なことに違いありません。

アーサー　あなたが至った二つ目の結論はどういうことですか？

アップルビー　今言うところです。我々の大部分は義務同士が争っているみたいにはばらばらに分裂しています。あれやこれや緊急にやる必要がありますが、一つのことを正せば、ほかの何かを狂わせることになります。我々は皆、最善を目指してやりたいのですが、何が最善か本当のところは分かりません。ところで、閣下には目の前にはっきりと定められた義務があります。わたしの言う意味がご理解いただけますかな。閣下はまだお若いから。

アーサー　ちょっと若いだけです。

アップルビー　閣下は仕事と人生で成功されました。我々誰もがそう言える訳ではありません。わたしの二つ目の結論は、閣下がこの世で一番幸せな方だということです。

アップルビー夫人 この人がそれを言っただけです。この人だったら、この十日間わたしの耳にやかましいくらい繰り返して、わたしの印象では、六週間前ここで昼食をいただいた日に、この人はリトル夫人に恋してしまっただけですわ。

アーサー だからといって、責めたりしませんよ。みんなそうなんですから……。誰のことも死ぬまでは幸せだと思っただけですわ。と言ったのはある賢い年寄りでした。「クリステイナはアーサーを見て、愛情を込めて腕に手を置く。アーサーはさつと腕を引っ込める。」ヴァイオレットが来た。

ヴァイオレットがヘンリー・プリチャードの腕にすがって入って来て、どっかと椅子に座る。

ヴァイオレット くたぐたぐだわ。もう少しで脚がもげそう。

アーサー 気をつけるんだよ、君、そうになったら随分みっともないことになるだろうからね。

ヴァイオレット あら、そうになったら義足をつけて踊るわ。

アーサー あのかわいそうなバンドはいつになったら帰らせてやるつもりなの？

ヴァイオレット そんな、もう一曲踊らなきゃ。だって、社交シーズン最後のダンスパーティーなのよ。もうみんな帰ってしまったから、今更威厳を保つ必要もないし。ヘンリーとアンとロニーしかいないんですもの。わたしたち、見事にワンステップ（四分の二拍子の社交ダンス）を踊ったばかりよね、ヘンリー？

ヘンリー 見事でした。あなたは素晴らしい踊り手です。

ヴァイオレット わたしの一つの特技なの。「バンドがワルツの演奏を始めているのが聞こえる。」まあ、また始めたわ。アンよ、間違いないわ。彼女はさっきまでイギリス人の寮母みたいに振る舞っていたけど、今は思う存分やっているんだわ。

アーサー 君たち女の子ってのは、いつまで経っても大人にならないね。

ヘンリー もう一曲、準備はいいですか、ヴァイオレット？

アーサー もう踊っちゃいけないよ、君、疲れ切っているみたいだから。

ヴァイオレット お母様と踊ったらどうなの、ヘンリー。わたしにはお母様のつま先が黒いサテンの上履きの中でうずうずしているのが分かるわ。

クリステイナ バカバカしい！ わたしは十五年も踊っていないのよ。

ヘンリー さあ、お母さん。踊り方くらい知ってることを見せるだけですよ。

ヘンリーはクリステイナの手をつかんで引き、立ち上がらせる。

クリステイナ わたしは若い頃だってほかの人と同じくらいにしか踊れなかったわ。

アーサー クリステイナがそういう言い方をする時は、ずっとうまかったっていうことだよ。

ヘンリー さあ、お母さん、行かないと、始める前に終わってしまいますよ。
クリステイーナ 乱暴にしないで、ヘンリー。

二人は邸の中に入って行く。

アップルビー わしたちだつて結構踊つたものだよな、ファニー、昔は。今どれくらい踊れるか試してみるのはどうかな、お前？

アップルビー夫人 黙つててよ、ジョージ。この体で踊るのを考えてもごらんなさいよ！

アップルビー お前がふっくらしているのは否定しないが、わしは痩せこけたのは決して好きじゃなかった。多分、わしたちが踊るのはこれが最後の機会だろうよ。

アップルビー夫人 わしたちがダンスを踊つたことを耳にしたら、本国の人たちは何と言うかしら？ 全く、ジョージ、あなたには驚かされるわ。

アーサー 「面白がつて」わたしは言いませんよ。

アップルビー お前だつて踊りたいんだろ、ファニー。笑われるのが怖いだけなんだ。

さあ、さもないとわしは独りで踊るぞ。

アップルビー夫人 「立ち上がりながら」あなたはバカなまねをして物笑いの種になる気にすつかりなっているのね。

二人は出て行く。アーサーは笑いながら二人を見守る。

アーサー 何ていい人たちだ！ あの二人が一緒にいるのを見ると本当に楽しいね。

ヴァイオレット アップルビーさんはあなたにとってもご執心ね。今さっき上エジプトの旅行のことをわたしに話してくださいましたの。とても感銘を受けたって。

わたしはあなたのことをとても誇りに思わなきゃいけないって言ったわ。

アーサー 君に僕を嫌いにならせようとするのに、それ以上の言葉は想像もつかないね。

ヴァイオレットは長いことアーサーを見てから目をそらす。話す時には当惑している。

ヴァイオレット わたしで満足なの、アーサー？

アーサー 君、何を言ってるの？

ヴァイオレット あの日の午後、わたしがあなたに話してからずっと……。

アーサー ああ、分かつてる。

ヴァイオレット わたしたちはあのことについて話していないわ。「アーサーに手を差し出しながら」わたしにとってもよくしてくれたことにお礼を言いたい。

アーサー 君が僕に感謝しなきゃならない理由はあまりないんじゃないだろうか。君の力になれていたらもっと楽だったろうが、じっとしたまま何もしないでいる以外に何をすればいいのかわからなかったんだ。

ヴァイオレット わたしはあなたに信頼されていると感じていて、それが救いだったわ。あなたは何かが変わったような気配を少しも見せなかった。かつてはわたしが一日中何をしてたのかわかって時々訊いたものだけど。最近はそれさえしなかったわね。

アーサー 自分の行動が完全に自由じゃないんじゃないかって、一瞬たりとも君に疑わせたくなかったんだ。

ヴァイオレット 分かってるわ。あなたほど思いやりのある人はいないもの。ああ、わたしはとても不幸だったわ、アーサー。この六週間は耐えられなかった。アーサー 君がそんなに血の気がなくて青ざめているのを見ると、僕の心はかき乱されたよ。度々君が泣いているのを見た時は、取り乱すところだった。どうしたらいいかわからなかったんだ。

ヴァイオレット わたしがあの人を愛したとしても、仕方がなかったのよ、アーサー。わたしの力ではどうしようもなかった。でも、できるだけのことにはやったのよ。何とかあの人と二人つきりにならないようにしてきたわ。

アーサー 彼に説明はしなかったの？

ヴァイオレット 説明すべきことなんかなさそうに思えたの。わたしは愛してないってあの人に言うべきだったっていうの？ わたしにはできなかった、アーサー、できなかったのよ。

アーサー いいんだよ！ いいんだ！

ヴァイオレット 一、二度、あの人にはわたしに手紙をくれた。あの人があるのは分かってたけど、わたしはその手紙を読まないことに決めていたの。でも、手紙がくると、我慢できなかった。読まない訳にいかなかったわ。わたしはひどくみじめだったから、あの人があつたを愛してっていうことはとても大きな意味があつたの。「アーサーは本能的に苦痛の身振りをする。」こんなこと言うつもりじゃなかった。どうか許して。

アーサー 分かる気がする。

ヴァイオレット 手紙の返事は出さなかったわ。

アーサー 彼は一、二度手紙をくれただけなの？

ヴァイオレット それだけよ。だからね、あの子は理解できないでいるのよ。わたしにひどい扱いを受けたと思ってるわ。ああ、それって何より辛いことだと思うの。わたしはあの子の目の中に苦しみがあるのを見てきた。なのに、わたしにできることは何もなかった。あの人に話す勇気がなかった。わたしは弱虫。ひどい弱虫だわ。なのに、あの子と二人だけになると、わたしは……。ああ、あの子があつたを愛してっていうのに、あんなに苦しめなきゃならないなんて、残酷だわ。

アーサー 君には何と言ったらいいのか分からない。君は時間という慈悲深い効果に希望を託さなければならぬと言ってみたと、何の慰めにもならぬ

さそうだ。でも、時が君の苦しみと彼の苦しみを和らげてくれるよ。ひよっとしたら、最悪の状況はもう終わってるのかもしれない。

ヴァイオレット そうであることを心から願うわ。わたしはあれ以上耐えられなかったでしょうね、アーサー。もう力尽きているもの。

アーサー ねえ君、君はもう体が疲れている。あの連中は追い返そう、そして、君は寝なさい。

ヴァイオレット ええ。わたし、疲れたわ。でも、あなたに言いたいのは、アーサー、あなたが正しいと思う。最悪の状況は終わったわ。わたしも前ほど苦しんでいないし。あの人のことを考えないでいるのが少し簡単になってる。あの人が会っても、どうにか陽気にあっけらかんとして無頓着でいられるもの。わたしはとても嬉しいの、アーサー。

アーサー 君はとても立派だった。僕は君に言っただろ、我々は皆、課された重荷に耐えられるだけの強さがあるって。

ヴァイオレット わたしのことを買い被らないでちょうだい。あの人のわたしに対する大きな愛を意識していなければ、わたしがやったことはできなかったわ。それって、わたしがひどく不実だっていうことでしょ、アーサー？

アーサー 「真剣に」そんなことはないよ、君。
ヴァイオレット あなたには分かるでしょ？ あの人の大きな愛がわたしにとってとても大きな意味があるの。どんなことよりも、それがわたしの救いになったわ。そのことだけで、この何週間かが耐えがたいものでなくなったの。あの人がわたしを愛していると分かって、わたしは満足してる。それ以上何も望まないわ。

アップルビー 夫妻が入って来る。アーサーはすぐに冷やかすような態度を装う。

アーサー あれ、これはどういうことですか？ もう降参した訳じゃないですよ？

アップルビー 気は早れども足は進まずでね。

アップルビー 夫人 本場で噂になるのも嫌ですけど、実を言うと、ちよっと息切れがして。

ヴァイオレット それじゃ、ちよっとお座りになってお休みください。

アップルビー 夫人 よろしければ、ちよっとだけ、そうしてからわたしたち帰りますわ。

クリステイーナがヘンリーと共に登場する。

アーサー 気の毒に、クリステイーナは身も心も完全に弱り切っている。

クリステイーナ バカなこと言わないでちょうだい、アーサー。

アーサー どんな具合だった？

ヘンリー 素晴らしかったです。母がこちらに合わせようとしないうこと以外は。わたしは母に、最近のダンスではやるべきことは一つしかないって言い続けました——全身の力を抜いて、あとは男に任せなさいって。

クリステイーナ 「くすくす笑いながら」最近のダンスって、破廉恥な遊びね。何が あったって、全身の力を抜く気にはなれないわ。

ヘンリー お母さんのダンスの概念は、人に合わせないってことなんだ。
クリステイーナ 「ヘンリーを愛情を込めて見ながら」生意気な子ね。

アップルビー夫人 「ヴァイオレットに向かって」あなたがパリーさんと踊っているところをぜひ見たかったですわ。彼は素晴らしい踊り手ですもの。

ヴァイオレット あの人はダンスがうまいでしょ？

ヘンリー 今夜は彼と踊らなかつたんですか、ヴァイオレット？

ヴァイオレット ええ。あの人はかなり遅く来たから、わたしと踊る相手は埋まっていたの。あの人にはアンコールの時について約束したんだけど、どこかの勿体ぶった年配の外交官が来て申し込まれたから、その人にロニーの分を譲ったのよ。

アップルビー夫人 それは残念ね。あなたとペリーと一緒にワルツを踊るなんて、めったに見られない光景に違いないのに。

ヴァイオレット あの人がダンスが上手なのをどうしてご存じなの？

アップルビー夫人 先週わたしたちのホテルでダンスパーティーが二、三度あって、その時に見たのよ。

ヴァイオレット ああ、そうなの。

アップルビー 「くすくす笑って」わたしはあの青年が好きです。彼はいいものを手に入れたら、それにしがみついて放しません。

ヴァイオレット あら、そうなの？

アップルビー ホテルにアメリカ人の若い娘が泊まっていしてね。ミス・ペンダーというんですが。ご存じでしょうか？

ヴァイオレット いいえ、知らないと思います。冬のお客様とはほとんどお知り合いにならないもので。

アップルビー夫人 その人は見た目が本当に絵のように美しくて。素晴らしい踊り手でもありますのよ。

アップルビー 昨日の晩はみんなが二人を見ていました。二人で素晴らしいペアを組んでいましたね。

ヴァイオレット あなたはその女性を知ってるの、ヘンリー？

ヘンリー ええ、二、三度出くわしたことがあります。とてもかわいらしいですよ。

アップルビー 彼女よりうまく踊れる人間はほかにいないと思うね。

ヘンリー だとしても、そのことでああなたが不愉快になる必要はありませんよ。

アップルビー わたしが見る限り、彼女は最初から最後までパリー君と実にうまく踊っていた。

アップルビー夫人 あの二人が一緒のところを見るのは思いがけない楽しみでしたわ。

ヴァイオレット 「ちよつと自信なげに」自分にふさわしいパートナーを捕まえたら、

その人とは離れない方がいいと、わたしはいつも思っています。

アップルビー夫人 あら、離れないだけじゃなかったと思うわ。彼女は彼に恋するあまり、それを見せないでいることができないほどのなの。

ヘンリー ロニーのような奴は見たことがありません。手に入りそうな幸運がちよつとでもあると、必ず手に入れるんです。

ヴァイオレット それで、あの人もその女性に恋してるの？

アップルビー いや、それは分かりません。

アップルビー夫人 今恋してなくても、じきにそうなるでしょう。彼女はあまりにもかわいらしいから、どんな男だって長くは抵抗できないわ。

アーサー 「陽気に」あなたは二人のことを野蠻だと思ってるんでしょ？

アップルビー夫人 とんでもない、わたしは二人を責めたりしないわ。素敵な男を幸せにするためでなかったら、何のためにかわいらしい娘がいるっていうの？ わたしだってかつてはかわいらしい娘だったのよ。

アーサー で、アップルビーさんも素敵な男だった？

アップルビー そうだったに違いないと思うね。お前がわしを幸せにしてくれたのは間違いないんだから、なあお前。

アップルビー夫人 それを書いておいてくれたらいいんだけど、ジョージ。あなたの肝臓の調子が悪くなった時、自分の側にそういうちよつとしたものを持っているの。

アップルビー おや、もう寝る時間だ、ファニー。奥方におやすみを言って帰ろう。

アップルビー夫人 おやすみなさい、リトル夫人。お招きくださって、ありがとうございます。さいました。楽しませていただきましたわ。

ヴァイオレット おやすみなさい。

アップルビー おやすみなさい。

アーサー 本国まで楽しい旅をされることを願っています。運のいい方たちだ、イギリスの春を見れますね。お帰りになる頃には、生垣が一斉に新芽を吹いていることでしょう。

アップルビー 夫妻は出て行く。

ヴァイオレット そのアメリカの子はいくつなの、ヘンリー？

ヘンリー えー、分かりませんが、十九か二十歳かと。

ヴァイオレット あの人たちが言うほどかわいいの？

ヘンリー そうです。

ヴァイオレット 金髪なの？

ヘンリー そうです。素晴らしい髪をしています。

ヴァイオレット あなたはその子のことを話に出さなかったけど。ロニーもその子に恋してると思う？

ヘンリー いや、それは分かりません。彼女は実に楽しい子です。それにですね、かわいい子に熱心に言い寄られたら嬉しいものなんです。

一瞬の沈黙がある。ヴァイオレットは聞いたばかりの話にひどく動揺している。アーサーは重大な局面が来ていることを悟る。

クリステイナ 「淡々とした様子で」何かが起きることを期待しましょうよ。ロニーが結婚しちゃいけない理由はないもの。最近では男性が結婚がするのが随分遅すぎると思うわ。

アンとロニーが登場する。

アン わたしったら、本当に恥ずかしいわ。みんな寝てしまったんじゃないかって思ってたんだけど。

ヴァイオレット 「ほほえみながら」楽しく踊れたかしら？

アン 考えてもみて、素敵なバンドがいて、フロアを独り占めなのよ。ところで、ヴァイオレット、帰ってもいいか、バンドが知りたがってるわ。

ヴァイオレット あなたと踊るのをやめなきゃならなくてごめんなさいね、ロニー。ロニー 運が悪かったんです。でも、こういう場合、わたしみたいな雑魚はそういうことを我慢しなければならぬでしょうね。

ヴァイオレット よければ、今、バンドを返す前に一曲踊りましょうよ。

ロニー 喜んで。

アーサーはちよつとびつくりして、不思議そうにヴァイオレットを見る。アンも驚く。

クリステイナ あなたたちがまたダンスを始める気なら、わたしたちは帰ります。

ヘンリーが朝早く出勤しなければならぬので。

ヴァイオレット それじゃ、おやすみなさい。

クリステイナ 「ヴァイオレットにキスしながら」ダンスパーティーは大成功だったわね。

ヴァイオレット そう言ってくださって嬉しいわ。

クリステイナ 「アーサーに向かって」おやすみなさい、お兄様。いつも神がお兄様を祝福してお守りくださいますように。

アーサー なあクリステイナ、どうしてなんだろう、この困惑する気持ちは？

クリステイナ お兄様に何かあったら、わたしたちにはどうすればいいか分からないわ。

アーサー バカなこと言わないでくれよ、お前。何も起きないよ。

クリステイナ 「にっこりして」お兄様がわたしのことを全くのバカだと思おうのをやめさせることはできないわ。

アーサー 出て行け、クリステイナ。余計なことを見つけ出すのをやめないと国外追放だぞ。

ヴァイオレット 今度は何を見つけたの？

アーサー 何も知らないでいれば国民も傷つかないようなささいなことさ。

クリステイナ 「ロニーと握手しながら」わたしはもうあなたに仕事を与えるのをしぶらないわ。わたしたちはみんなあなたに感謝すべきですもの。

ロニー わたしはちよつとばかり運がよかった、それだけのことです。騒ぐようなことは何ありません。

アーサー 踊りに行っておいで、君。全くのところ、時間もかなり遅くなってきた。

ヴァイオレット 「ロニーに向かって」もういいかしら？

ロニー バンドに何を演奏させましょうか？

二人は出て行く。

クリステイナ おやすみなさい、アン。

アン 「クリステイナにキスしながら」おやすみなさい、あなた。「ヘンリーは

アン、アーサーと握手する。ヘンリーと母親は出て行く。」クリステイナが何を言おうとしていたのか訊いちやいけないかしら？

アーサー 訊くという訳にはいかないだろうね。

アン でも、あなたは答えるつもりはないのね。どうしたの、アーサー？ 真つ青な顔して。

アーサー 何でもない。疲れてるんだ。忙しい日だったし、今度はダンスパーティーだ。「ワルツの曲が聞こえる。」ああ、いまましい曲だ！

アン 座ってお休みなさいな。一服したらいかか？ 「手をアーサーの腕に置きながら」ねえあなた。

アーサー お願いだから、僕を哀れんだりしないでくれ。

アン 率直に話していただけないかしら？ 力になれるかもしれないわ。昔は悩みを話してくれたものよ、アーサー。

アーサー 疲れているだけだと言ってるんだ。どうしようもないことを話して何の役に立つんだ？

アン あなたの幸せにかかわることなら、わたしがほとんどのことに気がつくってことが分かっているはずよ「目をそらしながら」わたしがあんなに苦労してロニーをパリに転勤させようとしたのはなぜだと思う？

アーサー うすうすは分かってたよ。君に感謝すべきかな？ 僕はすごく惨めで、すごく恥ずかしい。

アン あなたはミス・ペンダーのことは聞いたことがあるの？ アメリカ人の娘だけだ。

アーサー もちろん、あるよ。カイロで起きていることはすべて知るのが僕の仕事だ。

アン 解決策になるかもしれないって、思わない？

ヘンリーが入って来る。

アーサー 「つつけんどんに」何の用だ？

ヘンリー 申し訳ありません。母がここに扇子を忘れたもので。

ヘンリーは椅子から扇子を取り上げる。

アーサー 君たちは五分も前に帰ったものと思っていたが。

ヘンリー ちよつと立ち止まって、ロニーとヴァイオレットが踊るのを見ていたんです。驚きました、なかなかの見物ですよ。

アーサー 二人は素晴らしいペアになってるんだろ？

ヘンリー ヴァイオレットはくたくたなんじゃないでしょうか。一言もしゃべろうとしないし、顔が真っ青ですから。

アーサー 二人のダンスが終わったら、すぐ寝させるよ。

ヘンリー おやすみなさい。

アーサー 「ほほえみながら」おやすみ、坊や。

ヘンリー退場。

アン どうかしたの？

アーサー そのアメリカ娘のことを教えてくれ。ロニーに恋してるんだろ？

アン ええ、それははっきりしているわ。

アーサー で、彼の方は？

アン 知っての通り、あの子はとても不幸だったわ。

アーサー 「かんしゃくを起こしそうになって」あれは不幸な出来事だが、僕なら耐えられるだけの忍耐力を持っている。

アン で、今度は、弟も驚いたけど喜んでるわ。わたしは彼女に会ったことがあるの。かわいそうに、ロニーがわたしの弟だから、わたしに好かれようと懸命だったわ。すごくかわいいの。弟はまだ彼女に恋してはいない。でも、そうなるかもしれないと思う。弟は崖っぷちにいて、ほかに何かなければ落っこちてしまうでしょうから。

アーサー それは僕もうすうす気づいていた。いいかい、アン、僕は長く生きれば生きるほど、ますます人間は不可解だと思ふようになってきた。僕はずっと自分がかかなり寛大な人間で通っていると思つていた。自分の中にどんな卑劣な残忍さがあるのかは知る由もなかった。僕が君の弟をどんなに憎んでいるか、それを君に言うなんてことはあり得ないことだった。僕は君の弟に機嫌よく、愛想よくしななければならなかったが、本当を言うと、殺してしまいたかったんだ。

アン どうして弟をパリへ行かせなかったの？ 弟にあの仕事を与える必要があったと信じているの？

アーサー　すでに君の弟は貴重な存在になっている。
アン　それなら、うまくいくようにと祈るほかないわね。

一瞬の間がある。アーサーが話す時、初めはアンに対してよりもむしろ自分自身に対してである。

アーサー　この数か月の間、僕が何に耐えていたか、誰も知らない。嫉妬に苦しんでいるながら、ほんの少しでも機嫌の悪いところをヴァイオレットに見せたら、致命的なことになるだろうと思っていた。彼女がロニーを愛したとしても、それは彼女のせいじゃないと自分に言い聞かせ続けた。「おどけて」誰かが自分を求めていないという事実を腹を立てないでいることがどんなに難しいか、君には思いも寄らんだろうね。

アン　「くすくす笑って」あら、そんなことない、考えられるわ。

アーサー　この何週間かの間、ほとんどすべてのことが、僕がどのように行動するかにかかっているという事は分かっていたが、腹立たしいのは、じつと自制することしかできないことだった。彼女のみじめな姿を見て、僕の慰めが必要じゃないのが分かった。彼女を両腕に抱きたかったが、彼女が義務だからそうさせてくれるのも分かっていた。あの人のいいおバカさんのアップルビー夫妻が言ってくれたよ。僕はこの世で一番幸せな男に違いないと思うだ！ 毎週毎週、心を痛めながら、僕は無理して陽気に面白くしていたんだ。君は僕が面白いと思うかね、アン？
たまにはね。

アーサー　随分不公平な戦いだった。僕は常に不利な立場なんだ。彼はすべてにおいて僕より有利だ。でも、最後には僕が勝ったと思った。ヴァイオレットがあきらめ始めていると思った。彼女自身も最悪の状況は終わつたと言った。それなのに、あのいまましい連中が台なしにするに違いない。くそっ！ どうして？

アーサー　アップルビー夫妻がミス・ペンダーのことを彼女に話した。それはごく自然なことだった。彼らはホテルのゴシップを繰り返しちゃいけない訳なんか何も知らなかったんだから。

アン　だから、彼女はロニーと一緒に踊ろうって誘ったのかしら？

アーサー　そうさ。あれは重大な局面だった。彼女が彼を寄せつけないだけの力を持つていられたのは、彼が自分を愛していると分かっていたからなんだ。彼女はこれからどうするだろうか？

アン　ヘンリーが言ったことを聞いたでしょ。お互いに話してもいないみたいだ
って。

アーサー　その通りだ。

アン　どうしてあなたは二人を一緒に踊らせたの？ もう随分遅いからバンドを帰らすべきだって言うのは簡単だったでしょうに。

アーサー そんなことして何の役に立つんだ？ 何にもならない。僕は二人が会うのを邪魔するようなことは何もしたことがないんだ。完全に自由にさせてきた。

アン それがヴァイオレットに対してフェアだと思う？ あのね、女の行動はかなり衝動的なの。女には環境や状況がかなりの影響力を持つよ。ダンスを踊る興奮やこの素晴らしい夜の魅力やこの星の下の寂しさを考えてごらんなさいよ。あなたは不利な立場だとぐちるけど、今あなたは自分を二重に不利な立場に置いてしまったのよ。

アーサー それは僕にとって拷問のような苦しみだが、あの二人に自分たちでこの問題と戦って解決するチャンスを与えなければならぬ。

アン かわいそうに、彼女はとても若いのよ。

アーサー 若すぎるんだ。

アン そんなこと言わないで。彼女と結婚したことを後悔しているように聞こえるわ。

アーサー 愛というものが本当はどんなものか気づいた時からずっと、彼女が後悔の念に苦しんできたとは思わないか？ 僕は心から彼女を愛しているが、今は自分が過ちを犯したのが分かっている。変わらぬ優しさと献身といったわりで誰かに自分を愛させることができると思うかい？

アン 男には無理ね、多分。でも、女なら大、大、大丈夫よ！

アーサー 一目惚れでない相手を愛した人がいただろうか？ 僕は猛烈に彼女を幸せにしたいと思っているが、すっかりみじめにしてみましただけだ。もうやりようがないんだ。残念なことに、都合よく脳炎の発作で命を落としてもしない限り、僕は極めて丈夫なんだ。

アン あのね、アーサー、愛の苦しみには一つの代償があるのよ。苦しんでいる間は打ち勝てっこないと思うけど、打ち勝てるの。そして、苦しみが去ってしまうと、傷跡さえ残らないのよ。振り返って苦しみを思い出すと、あんなに苦しむことがあり得たなんて不思議だと思うのよ。

アーサー まるで経験があるようなことを言うね。

アン あるわ。

アーサー 僕はいつも君は冷静で自分を抑えていると思っているが。

アン わたしはある人を何年もどうしようもないくらい愛していたわ。わたしが言ってるだけなんだけど、わたしはその人の優秀な妻になれたと思う。でも、わたしの気持ち達が友達として以上のものだなんて、その人は一瞬たりとも思いつかなかった。そして結局、その人はほかの人と結婚したの。

アーサー ねえ君、僕は君が不幸だなんて思いたくない。

アン わたしは不幸じゃないわ。だから、あなたに悲しい話をしたのよ。わたしはもうすっかり乗り越えたから、もうその人にもその人の奥さんにも同等の愛情を持っているわ。

アーサー 知ってるかい、アン、かつて僕がもう少しで君に結婚を申し込むところだったのを？

アン 「陽気に」まあ、何てバカなことを！

アーサー 多分、申し込まなくてよかったんだ。一番の友達を失っていただろうから。

アン その代わり、わたしは今一番著名な人のプロホルズを断わるという満足感を感じ損ねたわ。どうして申し込まなかったの？

アーサー 君がそれだけでもいい友達だったからさ。そのまま全くいいと思っていた。

アン それが理由じゃないわ、アーサー。あなたが申し込まなかったのは、わたしを愛してなかったからよ。もし愛していたら、友情なんか無視したでしように。「アーサーが自分に注意を払っていないのを見ながら」どうしたの？

アーサー 音楽がやんだ。

アン 「わずかに唇をすぼめて」わたしの関心事にあまり興味がないみたいね。

アーサー ひたすらあなたの気持ちを紛らせようと話していたのに。

アーサー 悪かった。でも、この苦痛が僕の心を絶えず苦しめるんだ。アン、あの二人がここに戻って来たら、僕と一緒に庭の散歩に行つてほしいんだ。

アン どうして？ わたしはすごく疲れているのよ。もう寝ようと思うの。

アーサー ダメだ、僕のためにそうしてくれ、アン。二人にチャンスを与えたいんだ。我々みんなにとって最後のチャンスかもしれないからね。

アン 「わずかにため息をついて」分かったわ、あなたのためならそれくらいやるわ。

アーサー 君はいい友達なのに、僕はわがままな奴だ。

アン あなたに子供ができればいいのに、アーサー。それですべてが解決するかもしれないわ。

アーサー それは僕も心から望んでいるんだ。彼女だって子供の父親なら愛するかもしれないと思う。

アン その時には、とても寛容で非常に忍耐強くいられたのはあなただけだったということが彼女にも分かるでしょう。彼女が過去のことを思い起こす時、感謝の気持ちで一杯になるでしょうね。

ロニーとヴァイオレットが入ってくる。

ヴァイオレット バンドに帰ってもいいって言ったわ。

アーサー 彼らは二度も言われたくなかっただろうね。楽しく踊れたの？

ヴァイオレット とても疲れたわ。

ロニー あなたをあんなに長く踊らせるなんて、無茶でした。追い出される前におやすみなさいを言いますよ。

アーサー いや、帰る前に座ってタバコを一服しないか？ アンとわたしはちよつと庭の端まで散歩してナイル川を見るつもりなんだ。

ヴァイオレット まあ。

アン わたしは落ち着かなくて、とてもまだ眠れないの。

アーサーとアンは出て行く。ヴァイオレットとロニーはしばらく話さない。ごく軽い調子の会話から始まる。

ヴァイオレット　今さっきクリステイーナが言っていたのは何のことなの？　あなたと何か関係があったの？

ロニー　僕からそれを君に話すべきじゃないと思う。君が知るべきだとアーサー卿が思えば、恐らく卿が自分から君に話すだろう。

ヴァイオレット　もちろん、それが秘密なら、あなたがわたしに話しちゃいけないわ。

ロニー　君がどんなに素晴らしい踊り手だったか、忘れるところだった。

ヴァイオレット　「にっこりして」もう？

ロニー　この数週間というもの、君は僕に君と踊るチャンスをあまりくれなかった。ヴァイオレット　ゲズイーラ・パレスにダンスのとても上手な娘さんがいるって聞いてるけど。ミス・ペンダー、そういう名前じゃない？

ロニー　ああ、彼女はとても上手だよ。

ヴァイオレット　魅力的だって聞いているわ。

ロニー　とても。

ヴァイオレット　その娘さんに会いたいわ。わたしたちを会わせてくれる知り合いがいるかしら。

ロニー　「口調を変えて」何で彼女のことを持ち出すの？

ヴァイオレット　何か持ち出しちゃいけない理由でもあるの？

ロニー　この六週間で君と完全に二人つきりなのはこれが初めてなの分かってる？

ヴァイオレット　「ごく軽い口調のまま」あなたがアーサーの個人秘書をやめた時点で、わたしたちがお互いあまり会えなくなるのは避けられないことだったわ。

ロニー　僕が新しい仕事を喜んで受けたのは、ただ君から完全には切り離されまいと思っただけなんだ。

ヴァイオレット　わたしたちはお互いあまり頻繁には会わない方がよかったと思わない？

ロニー　僕が君に何をしたらっていうの、ヴァイオレット？　どうして君は僕をこんなふうに扱ってきたの？

ヴァイオレット　あなたを以前と違ったふうに扱ったという気はしないけど。

ロニー　どうして僕の手紙に返事をくれなかったの？

ヴァイオレット　「小さい声で」書くことがなかったのよ。

ロニー　僕が何に耐えていたか、君に想像できるだろうか。熱烈に君の手紙を待ち望んでいたこと。ほんの一言か二言で僕は満足できたのに。郵便配達が来るたびにどれだけ切実に期待したことか。そして、日一日と過ぎて行く時の僕の絶望感を。

ヴァイオレット　あなたはわたしに手紙を出すべきじゃなかった。

ロニー 僕が我慢できたと思うの？ 僕たちは二度と会えないだろうと思った日のことを忘れたの？ 僕にただの友達でいてほしかったのなら、どうして僕を愛してるなんて言ったの？ どうして僕にキスさせて抱かせたの？

ヴァイオレット あなたはよく分かってるでしょ。わたし、気が動転してたのよ。バカだった。あなたは——あなたはあの場の感情に重きを置き過ぎたんだわ。ああ、ヴァイオレット、どうしてそんなことが言えるの？ あの時、君が僕を愛してたのは分かってる。とにかく、過去のことは取り返しがつかないんだよ。僕は君を愛してた。君が僕を愛してたのも分かっている。僕たちはただの友達だった時には戻れないんだよ。

ヴァイオレット あなたは、アーサーがわたしの夫で、すべてが彼のお陰だということとを忘れてるわ。わたしたちは二人ともすべてが彼のお陰なのよ。

ロニー いや、それは片時も忘れてないよ。とにかく、今でも僕たちは二人ともやましいことはないし、以前だって自分たちを信じていることができただろう。僕が望んでいるのは、ただ君を愛するのを許してもらえることと、君が僕を愛してるのを知っていられることだけなんだ。

ヴァイオレット わたしにくれた最初の手紙に何て書いたか覚えてる？

ロニー ああ、あのことで僕を責めちゃいけないよ。それだけ長いこと、それだけ熱烈に君を愛してたっていうことなんだから。君も僕が好きだと思っただけが持てないでいたんだ。でも、それが分かった時は！ 望んでいることの十分の一も口に出したことはなかったのに。家に帰って、僕の心をあふれるほど満たしていたものを全部書いただけなんだ。君が与えてくれた素晴らしい幸せを僕がどれだけ謙虚に感謝しているか知ってもらいたかった。僕の心は隅から隅まで永遠に君のものだということを知ってもらいたかったんだよ。

ヴァイオレット わたしがそれにどう答えることができたっていうの？

ロニー 僕のことを恐れる必要はなかったんだよ、ヴァイオレット。君の気に障るんなら、僕は愛してるなんて言いもしなかっただろう。聖母マリア像みたいに君を心の中に持っていたらうね。僕たちがあちこちで会った時、僕たちの間にはたくさんの人がいて、一言も交わさなかったけど、この世には僕たちだけしかなくて、とにかく、何か妙に神秘的な感じで、僕は君のもので、君は僕のものだということが分かっていた気がする。ああ、ヴァイオレット、僕が望んでいたのはほんのちよっとの優しさだけなんだ。たったそれだけでも望みすぎかな？

ヴァイオレットは心の奥底まで感動する。ほとんど自分を抑えることができない。感じている苦痛に耐えきれない様子である。喉が渇いて話せないほどである。

ヴァイオレット ミス・ペンダーがあなたに恋してるのをみんなが知ってた。それは本当なの？

ロニー 女の子が自分に恋してると思うと、男は自惚れが強くなるのが普通だけど。
ヴァイオレット そんなことはないから。本当なの？ 正直に言ってちょうだい。

ロニー 多分、そうだろうね。

ヴァイオレット あなたが申し込んだら、彼女は結婚するかしら？

ロニー そう思うね。

ヴァイオレット 何かきっかけがなければ、彼女だってあなたに恋しっこないわ。

ロニー 彼女は大いにテニスをやるし、ダンスがとても好きなんだ。あのね、僕はとてもみじめだった。時として、君は憎んでいるみたいに僕を見た。僕を避けようとしているみたいだった。僕は忘れたかった。僕が何をやったから君が僕を邪険に扱うのか分からなかった。僕を望んでいるらしい人と一緒にいるのはとても楽しかった。僕が何をやっても彼女は喜んだ。彼女はちよつと君に似ている。彼女といると、少しは不幸でなくなつた。彼女が僕を恋してるのに気づいた時、僕は心が動かされてものすごく感謝したんだ。

ヴァイオレット あなたが彼女に恋してないのは確かなの？

ロニー ああ、間違いないよ。

ヴァイオレット でも、とても好きなんですよ？

ロニー ああ、とてもね。

ヴァイオレット わたしがいなければ、彼女に恋するだろうと思わない？

ロニー 分らないな。

ヴァイオレット 正直に言ってほしいの。

ロニー 「しぶしぶ」君は僕の愛を望んでいない。彼女はかわいくて親切で優しいんだ。

ヴァイオレット 彼女はあなたをととても幸せにするかもしれないと思うわ。

ロニー 何とも言えないね。

間がある。ヴァイオレットは無理して最終的な拒絶の意志を表明する。冷静に話そうと努力して、指が震える。

ヴァイオレット あなたが無駄に人生を浪費しなければならぬのは残念に思えるの。あなたはわたしのことを薄情な浮気者だと思ふんじゃないかしら。でも、わたしはそうじゃないわ。わたしが言うことはすべてその時に感じていないことなの。でも、……わたしは自分のことを完全に分かっていない訳ではないわ。わたしは誰かをひどく好きになつて夢中になるけど、どういふ訳が続かないの。わたしには……わたしには情熱を持続させる能力がないみたい。そういう人っているでしょ？ 情熱が生まれる時と全く同じように突然消えてしまうの。で、一度消えてしまうと——そう、二度と戻つて来ないのよ。その時には、わたしの胸をどきどきさせていた男の人の中に一体何を見出していたのか理解できないの。わたしがあなたをたくさん苦しめたのなら、すぐく申し訳ないわ。あなたはわたしに思つていたよりも

ずっと深刻に考えていたのね。情熱が消えた後は、どうしたらいいか分からなかった。どうか——どうか、許してちょうだい。

長い間がある。

ロニー もう僕を全然愛してないの？

ヴァイオレット 本当のことをお話しする方がいいでしょ？ あなたの気持ちを傷つけるのは承知の上だけ。わたしは自分がひどく恥ずかしいわ。あなたはわたしのことを随分浅はかだと思っくんじゃないかしら。

ロニー どうしてはつきり言わないの？

ヴァイオレット はつきり言ってほしい？「一旦躊躇するが、勇気を振り絞る。」ごめんなさい、ねえロニー、残念だけど、あなたの言う意味では全然好きじゃないわ。

ロニー 分かって嬉しいよ。

ヴァイオレット わたしのこと、怒ってない？

ロニー いや、そんなこと、ねえ、君はそうするしかないんだ。人はその人らしいことしかできない……。もう帰ってもいいかな？

ヴァイオレット アンのところへ寄っておやすみなさいを言わないの？

ロニー いいや、君がよければ、早く帰りたいんだ。

ヴァイオレット 分かったわ。わたしを許してちょうだい、ロニー。

ロニー おやすみ。

ロニーはヴァイオレットの手を取り、二人はお互いの目をのぞき込む。

ヴァイオレット おやすみなさい。

ロニーは出て行く。ヴァイオレットは胸の痛みを癒すかのように両手で自分の胸を抱き締める。アンとアーサーが戻って来る。

アン ロニーはどこなの？

ヴァイオレット 帰ったわ。もう遅いから。わたしからあなたにおやすみを言ってくれって。

アン ありがとう。確かに遅いわね。わたしもおやすみなさいを言うわ。「腰を曲げてヴァイオレットにキスする。」おやすみなさい、アーサー。

アーサー おやすみ。「アンは出て行く。アーサーは座る。サイス人（現サエルハガル人）が入って来て、明かりをいくつか消す。遠くで泣いているようなアラブの歌が聞こえる。アーサーはサイス人に身振りで指図する。」こっちはそのままにしておいてくれ。わたしが自分で消すから。「サイス人は一段下がった部屋に入って行き、明かりを一つだけ残してあとは全部消す。

今、明かりはちやうどアーサーとヴァイオレットの回りにだけ残っている。アラブの歌は苦しみに泣いているようである。」今夜は、ワルツとワンス テップを聞いた後だから、あれが変なふうに聞こえるね。

ヴァイオレット 随分遠くから聞こえてるみたいだわ。

アーサー 果てしない昔からずっと泣き叫んでるみたいだ。

ヴァイオレット 何て言ってるの？

アーサー 分からない。何か昔の悲しい歌に違いない。

ヴァイオレット 胸が張り裂けるようだよ。

アーサー もう終わった。

ヴァイオレット お庭はとても静かね。お庭も聴いているみたいだよ。

アーサー 君はひどく不幸なのかい、ヴァイオレット？

ヴァイオレット とっても。

アーサー 僕は君のためなら何だってするつもりなのに、君を慰めるためにできることがほとんどなくて、胸が張り裂けそうだよ。

ヴァイオレット ロニーはもうわたしを好きじゃないと思わなかった？

アーサー 彼の気持ちが変わるなんて、どうして僕に分かるというの？

ヴァイオレット あの人の気持ちが変わるなんて思ってもみなかったわ。あの人の愛にすっかり安心してたんですもの。誰かがわたしからあの人を取ることができるなんて思いも寄らなかった。

アーサー 彼がもう君を好きじゃないって言ったの？

ヴァイオレット いいえ。

アーサー 彼がミス・ペンダーに恋してるとは思えないが。

ヴァイオレット あなたはもうわたしにとっては何の意味もないって、あの人に言ったの。気まぐれで好きになったけどもう乗り越えたってあの人に言ったわ。わたしのことをバカな浮気女だと思わせたの。あの人は信じたわ。もしあの人が以前のように本当に、本当にわたしを愛していれば、わたしが何を言おうと、そんなの信じられないことだと分かったでしょう。ああ、もしあの人がわたしの目に安っぽく見えるようにしたとしても、わたしならそんなこと信じなかったのに。

アーサー かわいそうに。

ヴァイオレット あの人はまだ彼女に恋してないわ。わたしにはそれが分かるの。嬉しくて喜んでるだけなのよ。わたしのことは怒ってる。怒ってるとしたら、まだわたしを愛してるに違いないわ。あの人の望みはほんのちよつとのことだったの。ほんの一言があれば、今までのようにわたしを愛してくれただしようね。わたしが何をしたらいいの？ あなたにどんな害があったのかしら？ わたしはもう永久にあの人を追いつたわ。全部終わって片付いたのよ。でも、わたしは胸が痛むの。わたしはどうすればいいの、アーサー？

アーサー 君、勇気を持つんだ。頼むから、勇気を持ってくれ。

ヴァイオレット わたしたちがちよつとでもお互いを愛したことは恥ずかしいことでしょうかね。でも、どうやったら避けることができたかしら？ わたしたちは自分の行動は自分で決めることができるけど、どうやったら自分の気持ちを抑えることができるの？ だって、わたしたちの気持ちはわたしたち自身なのよ。わたしはこの先自分が何をしでかすか分からないの、アーサー。今夜まではそんなにひどくなかった。自分を抑えることができて、苦痛は減ってきていると思ってたもの……。心からあの人を望んでいるのに、あの人を行かせなければならぬ。ああ、あの人を憎い。あの人を憎いわ。もしあの人があつたを愛していたら、ほんの二、三週間くらいはわたしに誠実だったでしょうに。わたしにこんなひどい苦痛はもたらさないでしように。

アーサー 彼を不当に扱ってはいけませんよ、ヴァイオレット。彼は自分に何が起きてるか知らずに君に恋したんだと思う。知った時には、君と同じように立派に戦ったんだと思う。知つての通り、僕は少しのことも見逃さないんだ。僕は彼が僕という時のある種内気なところに気づいていたが、それはまるで僕の前にいるのがちよつと恥ずかしいみたいだった。彼は僕に悪いことをしているとんでもないしよつと怒りなかつたのだから、気の毒にさえ思うよ。彼も君と全く同じだけ苦しんだんだ。あの娘が彼を恋した時、それが新しい希望を与えそうに思えるのは、別に不思議なことじゃない。彼は不幸で、彼女は彼を慰めたんだ。彼女はちよつと君に似ているとアンが言っている。たとえ彼が彼女を愛するとしても、多分、彼が愛するのは彼女の中にいる君だろう。

ヴァイオレット どうしてわたしにそんなことをおっしゃるの？

アーサー 君はとても不幸だった。もう君に辛い思いをしてほしくないんだ。初恋の相手がそれだけの価値のない人間だったと君が思うなんて、僕には耐えられない。今君が治らないと思つている傷は時間が癒してくれると思うが、そうなつた時に、君の恋をひたすら美しいものとして思い返してほしいんだ。

ヴァイオレット わたしは獣だわ、アーサー。わたしはあなたによくしてもらうほど価値のある人間じゃないわ。

アーサー ほかにも言わなきゃならないことがあるんだ……。野心的な連中が、僕を片づける計画を立てていたらしい。

ヴァイオレット 「びっくりして」アーサー！

アーサー 今朝、閲兵に行く途中で僕を殺す陰謀があつたのが分かつている。

ヴァイオレット 何て恐ろしい！

アーサー いや、何も恐れることはないよ。騒ぐことなくすべて解決したから。旧友のオスマン・パシヤは健康のためにしばらく田舎の私有地で過ごすつもりで、半ダースの愚かな若者たちは投獄されている。でも、ロニーがいなければ計画通り殺されていたかもしれない。僕を救つたのはロニーだったんだ。

ヴァイオレット ロニーが？ まあ、よかった。少しはほかのことの埋め合わせになるわ。

アーサー 彼は立派だった。決断力と冷静さを示した。

ヴァイオレット ああ、あなた！ わたしの、わたしのアーサー！

アーサー 後悔してないの？

ヴァイオレット 自分のやったことが嬉しいの、アーサー。あなたがわたしに与えてくださるもののお返しがほとんどできてない時々思ってたの。でも、少なくとも今度は、あなたにお返しできるものはすべてお返ししたわ。

アーサー それは無駄にならないと思ってくれ。義務を果たすと言うと随分冷たくて楽しくないことのように聞こえるが、とにかく、最後には妙に満足感を得られるものなんだ。

ヴァイオレット あなたを失ったら、わたしはどうすればいいの？ それを考えると、恐怖で気分が悪くなるわ。

アーサー 「優しくほほえんで」僕が逃れることができ、君は喜ぶだろうと思っていたよ。

ヴァイオレット わたしが苦しんだことはすべてその甲斐があったんだわ。わたしがしたことはあなたのためになったんでしょ？ そして、イギリスのためにも……。わたし、とても疲れたわ。

アーサー 寝たらどうだい、君？

ヴァイオレット いいえ、まだ寝たくないの。疲れすぎて。もう少しここにいさせてちょうだい。

アーサー 足を載せなさい。

ヴァイオレット 側に来てちょうだい、アーサー。慰めてほしいの。あなたはわたしにとっても優しくいい人だわ、アーサー。あなたがいてくれてとても嬉しいの。わたしを見捨てないでね。

アーサー 見捨てたりしないよ。「ヴァイオレットはちよつと身を震わせる。」どうしたの？

ヴァイオレット あの人が早く彼女と結婚しますように。わたしはあなたのいい妻になりたいわ。あなたの愛が欲しいの。あなたの愛がものすごく欲しいのよ。

アーサー かわいい奴め。

ヴァイオレット 抱いてちょうだい。とても疲れたわ。

アーサー 半分眠ってるね……。眠ったのかい？

ヴァイオレットの目は閉じられている。アーサーはヴァイオレットに優しくキスする。また遠くでベッドウィン族（アラブ系の遊牧民）の物悲しい泣くような愛の歌が聞こえる。

終わり